

筋 田 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書

1993

山 形 県
山形県教育委員会

すじ た
筋 田 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書

平成5年

山形県
山形県教育委員会



調査区完掘状況（北東より）



調査区完掘状況（南西より）

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した筋田遺跡の調査成果をまとめたものです。

筋田遺跡は日本海に面した庄内平野北辺の遊佐町に所在します。遺跡周辺は雄大な鳥海山をはじめとする豊かな自然が広がるのどかな田園地帯です。

調査では畝状溝跡をはじめとする古代の遺構群が多数姿を現しました。その内容は本報告書に書き留められた通りです。自然地形に沿って配置された建物跡やこれらを取り巻く畠跡、川跡などが特徴となるものです。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造した貴重な国民的財産で、調査により明らかにされた内容は過去の村や生活の有様を彷彿と再現してくれるものでした。

こうした祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと伝え残していくこととは、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務の一つと考えます。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りを進めるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

1 本書は山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した
県営圃場整備事業（高瀬川地区）に係わる「筋田遺跡」の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は平成4年7月13日から同年9月30日までの延べ50日間行った。

3 遺跡の所在地は山形県飽海郡遊佐町大字北目字筋田である。

4 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治

主任調査員 野尻 侃

調　　査　員 阿部明彦（現場主任）

調　　査　員 植松暁彦

事　務　局　事　務　局　長　深瀬征二

事務局長補佐 鈴木常夫

主任事務員 永井健郎

事　務　局　員 渋江正義・松本明美・高橋由佳・志田恵子・大内千賀子

5 発掘調査にあたっては遊佐町教育委員会、山形県農林水産部農地建設課、庄内支庁、
経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、庄内教育事務所など関係機関にご協
力を得た。

6 本書の作成は阿部明彦、植松暁彦が担当した。遺構図は主として植松が、遺物の実測
図は主として阿部が行った。本文の執筆は阿部・植松の協議を経て両名が分担した。挿
図の作成にあたっては小沼末子、進藤純子、尾留川道子、市川則子、斎藤妙子、佐藤智
美、戸部奈津子の補助を得た。

7 編集は安部 実が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。

凡　　例

1 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1970) を使用した。

2 本書で使用した分類記号は下記の通りである。

| | | |
|-----------|-------------|------------------|
| S B……建物跡 | E B……掘り方 | S K……土坑 |
| S D……溝状遺構 | S P……ピット | S X……性格不明の落ち込み遺構 |
| S A……柱　列 | R P……登録した土器 | R Q……登録した石製品 |

3 挿図中的方位は磁北を示している。遺構の挿図縮尺は1/10、1/20、1/40、1/60で採録し各々にスケールを示した。

図版の遺物のうち、単体の土器は1/6、井戸枠は1/16で採録した。

4 遺物は原則として1/4以上残存するものを実測対象としたが、甕、鍋等の大形器種については、1/4以下のものでも実測を行ったものがある。なお、実測図中の白ヌキ断面は須恵器・土師器・施釉陶器、右下にドットの付されるものはあかやき土器を示している。また、土器の内外面に網点の付されたものは黒色化処理が施されたことを表わしている。なお、遺物番号は挿図・写真図版ともに共通し、本文中においてもその番号を用いて指示・説明を行っている。

目 次

| | |
|-----------------|----|
| I 調査に至る経過..... | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | |
| 1 地理的環境..... | 2 |
| 2 歴史的環境..... | 2 |
| III 調査の概要..... | 3 |
| IV 遺跡の概観 | |
| 1 調査区と層序..... | 4 |
| 2 遺構と遺物の分布..... | 4 |
| V 検出遺構 | |
| 1 掘立柱建物跡..... | 7 |
| 2 井戸跡..... | 7 |
| 3 土 壤..... | 9 |
| 4 落ち込み..... | 11 |
| 5 畝状溝跡遺構..... | 11 |
| VI 出土遺物 | |
| 1 土 器..... | 21 |
| 2 木製品・土製品..... | 23 |
| VII まとめ..... | 32 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------------|-------|
| 第1図 遺跡位置図..... | 1 |
| 第2図 調査区位置図..... | 3 |
| 第3図 遺構配置図..... | 5 • 6 |
| 第4図 S B 1 建物跡..... | 8 |
| 第5図 T 9 - S E 53 • 274 • 438 井戸跡..... | 10 |
| 第6図 S K 698 • 407 • S X 180..... | 12 |
| 第7図 S G 19 河跡..... | 13 |
| 第8図 S G 19 河跡..... | 14 |
| 第9図 S G 19 河跡..... | 15 |
| 第10図 S G 19 河跡・畝状遺構A群..... | 16 |
| 第11図 遺構平面図 (1) | 17 |
| 第12図 遺構平面図 (2) | 18 |
| 第13図 遺構平面図 (3) | 19 |

| | | |
|------|----------|----|
| 第14図 | 遺構平面図（4） | 20 |
| 第15図 | 遺物実測図（1） | 24 |
| 第16図 | 遺物実測図（2） | 25 |
| 第17図 | 遺物実測図（3） | 26 |
| 第18図 | 遺物実測図（4） | 27 |
| 第19図 | 遺物実測図（5） | 28 |
| 第20図 | 遺物実測図（6） | 29 |
| 第21図 | 遺物実測図（7） | 30 |
| 第22図 | 遺物実測図（8） | 31 |

図版目次

- 図版1 A区完掘状況・B区S B 1
- 図版2 調査区遠景・調査風景
- 図版3 S B 1 完掘状況他
- 図版4 S B 1 E B 529・539・534・803・804・805・807・905
- 図版5 トレンチ9-S E 53完掘状況他
- 図版6 S K698遺物出土状況他
- 図版7 S K407遺物出土状況他
- 図版8 S X180遺物出土状況他
- 図版9 A区畝状遺構A群完掘状況他
- 図版10 A区畝状遺構B・C群完掘状況他
- 図版11 B区畝状遺構D群完掘状況他
- 図版12 B区畝状遺構E群完掘状況他
- 図版13 S G19完掘状況
- 図版14 S G19遺物出土状況他
- 図版15 S G19遺物出土状況他
- 図版16 出土遺物（1）
- 図版17 出土遺物（2）
- 図版18 出土遺物（3）
- 図版19 出土遺物（4）
- 図版20 出土遺物（5）
- 図版21 出土遺物（6）
- 図版22 出土遺物（7）
- 図版23 出土遺物（8）

I 調査に至る経過

遊佐町北西部の水田地帯に位置する北目から山崎地区の一帯には、平安時代を主とする集落遺跡が数多く点在している。これらの遺跡は庄内高瀬川の両岸や月光川右岸に沿って分布しており、両河川の形成した自然堤防などの微高地を集落の立地基盤としたことが明らかである。しかし、遺跡付近は海拔4m以下と全体に標高が低く、また庄内高瀬川と合流して北進する月光川の河口部が低湿な袋状平野の出口と重なっていることから一度洪水ともなれば大きな災害が発生したと推察される。集落の停廃や移動を余儀なくされる厳しい現実が一方には並存していたと考えられよう。

しかし、古代の集落が断続的ながらも営まれる事実は、比較的高燥で水の確保が容易な微高地での暮らしと河川の氾濫により運ばれる肥沃な土壌などが当時の水田耕作には最適であったためとも考えられる。このような地域に立地する筋田遺跡は平成2年度の分布調査で遺物の分布が確認され、平成3年になって新規の遺跡として登録された。

今回の調査は平成4年度に行われる県営圃場整備事業（高瀬川地区）を原因としたものである。調査に先立ち県教育委員会は前年の10月16・17日に遺跡範囲や保存状況を把握するための試掘調査を実施して、その結果を基に関係機関との間で現状保存の可能性や施行方法等の調整を図っている。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については記録による保存のための緊急発掘調査を行うこととして今回の調査に至ったものである。



第I図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境（第1図）

庄内平野の北端部は、北東に出羽富士とも称される秀麗な鳥海山、西には北西の季節風を遮る庄内砂丘が真近に迫り、東西2km程の狭隘で低湿な平野が広がっている。

本遺跡は遊佐町大字北目字筋田に所在し、丸子集落の北側に位置する平安時代の集落遺跡である。遺跡範囲は東西約240m、南北約450mほどと推定され、面積にして100,000m²強の広がりを持つ。現在の地目は水田で標高は約3m内外である。遺跡のすぐ西には北流する月光川が遺跡西辺を縁取るように横たわり、下流3kmほどで日本海へと注ぎ込む。周辺にはこれら河川が形成した自然堤防の微高地上に数多くの遺跡が点在し、自然堤防の分布に沿った古代集落の在り方がみられる。

このような遺跡の形態は当時の社会的背景もさることながら、この地域の自然環境が大きく影響していたと考えられる。例えば、河川が氾濫して溢れ出た水が河口付近に留まって集落を浸水させるようなことが頻繁に起こり、必然的に集落は被害の程度に応じて再構築や移動などを繰り返さざるを得なかった。あるいは、沖積が途上であることから潟湖の存在が考えられ、製塩や漁労などとの関わりも当時の暮らしの中では重要な要素であったなどである。本遺跡を含めて近隣遺跡から製塩土器が比較的まとまって出土する状況は農耕以外のこうした内容をも裏書きするかのようである。ただし、漁労に関わると判断できる遺物は若干の土錘類に限られており実態がどのようなものだったかは不確かである。

2 歴史的環境（第1図）

平安時代遺跡の分布は既に述べたように沖積平野の川筋に集中している。本遺跡の立地する庄内高瀬川の中・下流域には仁田田遺跡に始まって大坪遺跡・宅田遺跡・石田遺跡・上高田遺跡・宮ノ下遺跡・北目長田遺跡・野瀬遺跡・筋田遺跡などの十数ヶ所もの遺跡が断続的に展開しており、その中で最も下流部に位置しているのが本遺跡である。

これらの遺跡は近年の圃場整備事業の展開によって継続的な発掘調査が進められており、その内容が次第に明らかとなってきている。これまでに調査された遺跡は高瀬川の左岸側に仁田田遺跡・大坪遺跡・石田遺跡・木原遺跡、右岸側に下山崎の中田浦遺跡等がある。

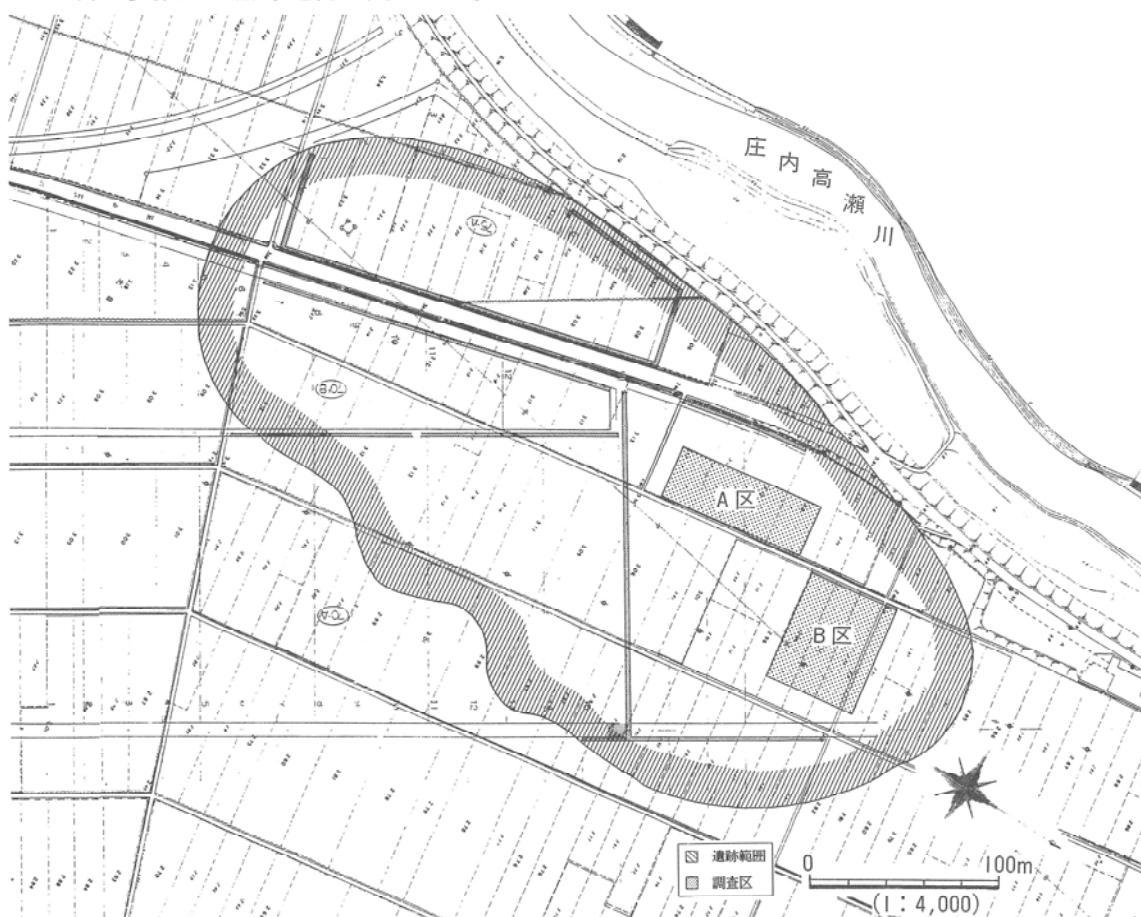
調査成果の一端からはこれら遺跡の上限が古くても8世紀中葉～後葉頃までのものであり、大半は9世紀前半～10世紀中葉頃までに営まれたことが判明している。なお、続く11世紀代に下がる遺跡は極めて希であり、これまでの知見では下長橋遺跡での新相がわずかに隙間を埋めてくれる程度であろう。一方、検出遺構は主に掘立柱建物跡と井戸跡、土壙、および畝跡と考えられる畝状溝跡群を一単位とする構成が共通的に認められ、農耕を主とする村落的様相を強く示していると判断される。しかし、遺跡によっては建物規模や特殊な出土遺物などから見て一般的な集落とは異なると判断できるものも認められる。例えば、地鎮遺構を伴った下長橋遺跡や、板塀列で囲まれる小深田遺跡などである、しかし、これら遺跡の性格が郡レベルでのどのようなものだったかは未だ結論を得ていない。

III 調査の概要（第2図）

筋田遺跡の発掘調査は昨年実施した遺跡詳細分布調査の結果に基づき、遺跡範囲の北西部に係る2,000m²（A区）と北東部の約3,000m²（B区）の計5,000m²を主な調査対象地区として実施したものである。

はじめに灌漑排水事業の工事用計画杭を準用して、5×5mを一単位とするグリッドを設定することから調査を開始した。グリッドはA区東側農道の延長に沿う南北方向のY軸、およびこれに直行する東西線をX軸とした。座標は南西隅を代表させて、(X-Y) = (0-A)で呼称し、調査区毎に0~11-A~Oグリッドなどと区別される。なお、X軸は磁北に対し8°5'西方に傾いていた。

A・B区ともに重機による粗堀後にジョレンを用いて面整理を行い遺構・遺物を検出した。その後、遺構は手堀により半裁または土層観察用のベルトを残しながら掘り進め、必要に応じて平面図・断面図作成などの途中経過を記す作業や写真撮影を実施している。また、これらの作業と並行して新設の計画農道予定地部分のトレーンチ調査を行ったところ、井戸跡、土坑、溝跡等の存在が若干部で確認されたことから急遽その箇所の精査・記録作業も行っている。調査の結果、本遺跡からは掘立柱建物跡1棟、井戸跡、土坑、畝状溝跡群、河川跡等の遺構が総数にして500基以上検出され、灰釉陶器や綠釉陶器などの移入品をも含む多数の土器等遺物が出土した。



第2図 調査区位置図

IV 遺跡の概観

1 調査区と層序

主たる調査区のA・B区は筋田遺跡の全体から見れば、南北に延びる遺跡範囲の北半部分に当たっている。両調査区は概ね安定した基盤層が認められるが、東側のB区南東縁から徐々に傾斜が始まって土層も粘質から泥炭質の低湿地特有のものに移行していく。

平成3年に実施された試掘調査の結果と今回の農道部分部に当たるトレンチ調査などを含めて立地環境を概観すると、遺構の構築される安定な自然堤防が現在の庄内高瀬川に沿って並走していると理解される。東側はB区で認めたように自然堤防の後背湿地が広がると推測され、田面から地山までの深さが50cm以上に及ぶ地点が認められた。

一方、トレンチ5・9の調査結果から明らかに遺跡範囲の東端と考えられる地点にも大型の井戸跡が見つかるなど、遺跡周辺の所処に高台や遺構の点在する状況もみられた。地形的に起伏に富み、自然堤防の形成も途上であった古環境が推測される。

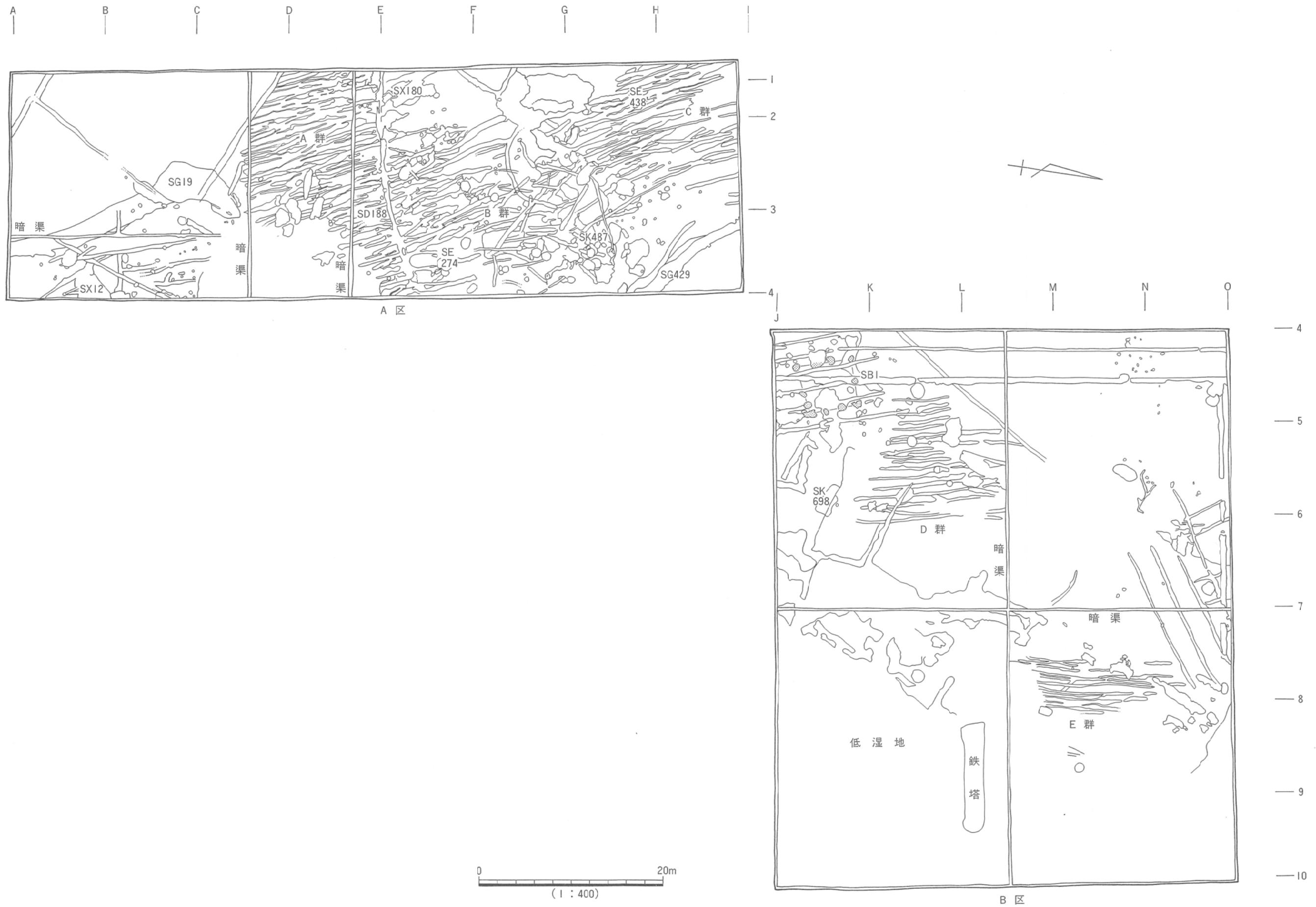
基本層序はI層が褐色から青灰色の耕作土、II層が暗褐色シルト層、III層が黄灰色シルトの基盤層である。II層下部から遺物の包蔵が認められ、遺構の検出面はIII層直上面であった。また、遺構覆土は黒褐色シルトを基調とするが、一部には基盤層と覆土との識別が困難なものがあり、わずかな汚れや土質の違いから辛うじて区別できたものがある。河川の氾濫と急激な埋積作用によると推測される。すなわち河川の氾濫が遺跡の存続に大きく作用したと考えられ、集落の廃絶もこのことに起因したと判断される。

2 遺構と遺物の分布（第3図）

検出された遺構は堀立柱建物跡1棟、井戸跡2基、土坑223基、畝状溝跡502条、河川跡1条、ピット104基、性格不明遺構23基などである。これら遺構の分布は第3図に示した通りであるが、この中では調査区内を北西あるいは南北方向に走る長さ10~15m規模の畝状溝跡群が特徴的な存在となる。A区には中央から北半部全域に前記の畝状溝跡群が分布し、南半部に河川跡のSG19が南東方向に延び出していた。また、中央の東縁から北半部にかけては素堀の井戸や土坑などがややまとまって検出される。

B区では2×3間規模の堀立柱建物跡が南西隅に位置し、これに接する北東部分に畝状溝跡群のまとまりが認められた。また、北東部L-8グリッドにもほぼ南北方向に延びる同様の溝跡が10数本からなる一群として分布している。一方、東半部はやや低湿となって東側に傾斜し泥炭層が堆積していた。これらの在り方は、畝状溝跡群・建物跡・土坑群などの配置や組成関係で一定の相関があったと考えさせ、堀立柱建物跡や土坑の検出されるところには畝状溝跡群が重複しない等の状況とみられる。すなわち、集落構成における住空間と生産域の共存的関係が窺われ、畝跡群での連続的な推移が注目される。これら建物跡・井戸跡・土坑等の分布からは集落の中心部がA区北半の東側および、B区南側の調査区外に広がっていた可能性が推測される。

遺物は遺構検出作業段階でその多くが検出されたが、畝状溝跡や土坑内にもまとまったものが認められた。B区では遺構内のものがほとんどで全体的に希薄であった。



第3図 遺構配置図

V 検出遺構

1 掘立柱建物跡（第4図・図版3・4）

検出された掘立柱建物跡はSB1の1棟に限られている。この他にもA区の南東部では掘り方と考えられる幾つかの柱穴が散見されたが、調査区外にかかるためか明確に建物跡と認識できるまでには至らなかった。おそらく複数棟の建物跡の存在が推測される。

SB1建物跡

B区南西隅の4～5-I～Jグリッドに位置し、III層上面で検出された梁行2間・桁行3間規模の南北棟である。桁行の柱間は7尺等間、同じく梁行は西側のEB521・807で18尺、EB807・804間でも8尺を基本にしていたと捉えられるが、多少のばらつきが認められる。なお、建物の主軸方位は磁北から $19^{\circ} 60'$ 西に傾いていた。

SB1建物跡は柱間距離などに若干のばらつきは見られるものの、対応する梁行・桁行での柱間がほぼ等しい在り方を呈しており、EB539では柱根が残存していた。

掘り方プランは円形もしくは橙円形で、径は60～80cm内外ものが大半である。掘り方の深さは検出面から33～58cmを測り、規模的に大きく、造りのしっかりした柱穴と云えそうである。集落における母屋的な建物跡としての性格が考えられる。なお、柱穴内からの出土遺物は根固め石と考えられる20cm前後の小礫や、須恵器坏・あかやき土器坏・同甕類の破片資料若干が検出された程度であった。

2 井戸跡（第5図・図版5）

井戸跡は調査区内と新設農道に係るトレンチから、井戸枠などの施設の認められるものと素掘りと考えられるものを含めて計3基を検出した。以下にこれらの概略を記していく。

SE53井戸跡

新設町道に係る遺跡南東縁部のトレンチ9において検出された井戸跡である。南北に延びる畝状溝跡群の南に接し、井戸枠の設置方位も畝の走向にほぼ一致していた。

井戸枠は南北86cm、東西79cmを測る略方形の内法を有し、深さは確認面から145cmである。なお、底部は平坦で、特別な井戸眼他の施設を認めなかった。

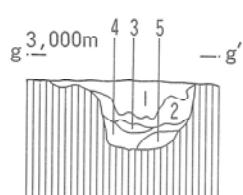
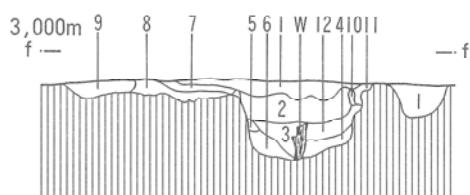
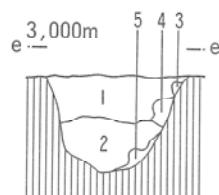
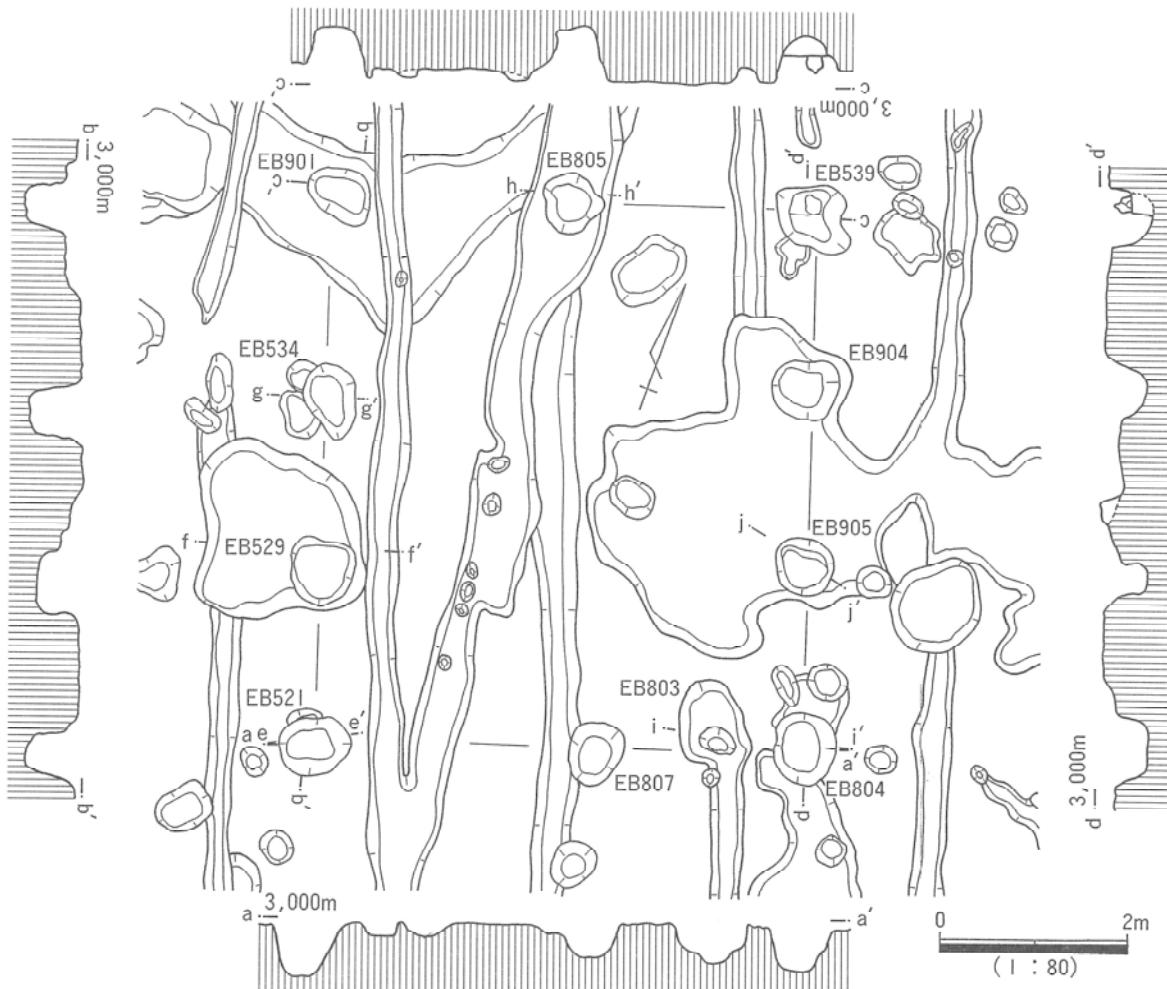
井桁は長さ1.2m前後、幅20～24cm、厚さ6～8cmほどのクリの板材を5段以上で組み上げる構造で、保存状況が非常に良好であった。

掘り方はプランが隅丸方形で、長軸119cm、短軸97cmほどの規模があり、掘り込みによる壁の状況は急斜である。

覆土は4層かからなり1層が暗褐色粘質土、2層が灰色粘質シルト、3層が草木等の有機物を含む灰色粘質シルト、4層が灰黄色ピートの順であり、自然堆積による埋積であることが推測された。なお、土器等の出土遺物は皆無であるため帰属時期等は不詳である。

SE274井戸跡

A区中央の東半部、3-Fグリッドに位置し、中央の畝状溝跡群に東接する素堀の井戸跡である。畝状溝跡の一部と考えられるSD275と重複関係が認められ、土層断面などから

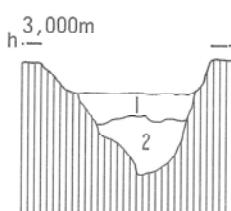


SBI-EB521

1 灰黄褐色粘質シルト(10YR6/2) 岩化粒・塊を多く含み、灰
色褐色シルト(10YR5/2)を微量に霜降り状に含み、にぶい黄褐色
シルト(10YR5/2)を微量に霜降り状に含み、2層目と
の間に酸化鉄層を形成し、しまる。
2 灰色粘質シルト(7-5Y5/1) 岩化粒・塊を含み、酸化鉄を含む。
3 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/3) Iを斑状に含む。
4 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/3) 岩化粒、酸化鉄を下層
に集中して含み、3層より色調暗い。
5 灰色小砂(7-5Y5/1) 岩化粒を2,3含む。

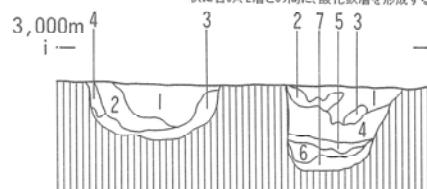
SBI-EB529

1 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR5/3) 岩化粒を若干含み、酸化鉄を多く含み、しまる。
2 灰黄褐色シルト(10YR6/2) 岩化粒を多く含み、にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を霜降り状に含む。
3 灰色砂質シルト(10Y5/1) 岩化粒を多く含み、にぶい黄褐色砂質(10YR6/3)を霜降り状に含む。
4 灰色砂(10Y5/1) 岩化粒を含み、にぶい黄褐色微砂(10YR6/3)を霜降り状に含む。
5 にぶい黄褐色微砂(7-5Y5/1) 岩化粒を1,2含み、酸化鉄を含む。
6 灰色微砂(7-5Y5/1) 岩化粒を2,3含み、酸化鉄を含む。
7 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR4/3) 岩化粒を2,3含み、にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を塊で含む。
8 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR4/3) にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を塊で含む。
9 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR4/3) 岩化粒を若干含み、にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を霜降り状に含む。
10 にぶい黄褐色シルト(10YR6/3) 岩化粒を1,2含む。
11 灰黄褐色粘質シルト(10YR6/2) 岩化粒を1,2含み、にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を
塊で混入する。
12 にぶい黄褐色シルト(10YR6/3) 岩化粒を含み、褐灰色粘質シルト(10YR6/1)を霜降り状に含み、2層との間に、酸化鉄層を形成す。



SBI-SP803

1 灰黄褐色粘質シルト(10YR6/2) 酸化鉄が多く、にぶい
黄褐色粘質シルト(10YR6/3)を霜降り状に混入し、灰黄褐色粘質シルト(10YR6/2)の塊を混
入する。岩化粒を含む。2層目との間に酸化鉄塊
層を形成する。
2 灰色砂質シルト(10Y5/1) 岩化粒を若干含む。

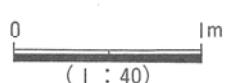


SBI-EB804

1 灰黄褐色粘質シルト(10YR5/2) 岩化粒を含み、土
器片を含み、にぶい黄褐色シルト(10YR6/3)を
塊で混入する。しまる。
2 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/4) 岩化粒を2,3
含み、上層にIを塊で含む。
3 灰黄褐色粘質シルト(10YR6/2) 岩化粒、塊を多く含
み、より色調が暗い。
4 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/3) 岩化粒を若干
含み、酸化鉄を多く含み、一部オレンジがかる。
5 褐色シルト(10YR4/6) 岩化粒を1,2含み、酸化鉄を
含む。
6 灰色シルト(7-5Y5/1) 岩化粒を若干含み、砂質を
含む。
7 灰色小砂(7-5Y5/1) 岩化粒を1,2含む。

SBI-EB905

1 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/3) 下層に灰色砂
質シルト(10YR5/1)を含み、上層との間に酸化
鉄塊を含む。
2 灰色小砂(10Y5/1) 岩化粒を1-2含む。
3 にぶい黄褐色粘質シルト(10YR6/3) 岩化粒を若干
含み、酸化鉄を多く含む。灰色小砂(10YR6/1)
を下層に含み、間に酸化鉄を含む。



第4図 SBI建物跡

井戸跡が新しいと判断された。

平面形は長径1.73m、短径1.52mの円形を呈し、確認面からの深さは84cmである。掘り込みによる壁の状況は全体に急斜で底面は平坦である。また、その覆土は10層からなり、上層が褐灰色粘質シルト、下層は遺物を多く含む灰色の粘質シルトで壁際には砂粒が流入している。

遺物は須恵器甕の体部大形破片が覆土4～6層にかけてまとまっていた。外面に格子目風のタタキ、内面に同心円状アテの調整が認められるが、器形等は判然としない。

S E 438井戸跡

A区北西半部、1-Hグリッドに位置し、周辺の畝状溝跡群と重複して検出された素堀の井戸跡である。土層断面などから南北に伸びる溝跡群よりは後出のものと判断された。

平面形はほぼ円形で、長径1.35m、短径1.07mの掘り方があり、深さは確認面から46cmである。壁の状態はテラス様の西側部分を除けば、西側で急傾、東側で緩い傾斜を呈していた。覆土は4層で1層が灰黄褐色粘質シルト、2層が灰褐色微砂、3層が灰褐色粘質シルト、最下層は土器等遺物を含む灰色の粘質土である。

遺物は須恵器の台付長頸壺が最下層から出土した（第18図19）。これは頸部・底部を欠く体部の大形破片ながら、肩部に最大径を持つ丸味の強い器形、肩～頸部の作りが三段で作られるなどの成形技法の窺えるもので、SD180出土の第17図4や第20図24などに類似する資料と考えられる。

3 土坑（第6図）

土坑は223基検出された。これらは平面形・規模・などから分類できるが、以下では特徴的な幾つかについて概述する。

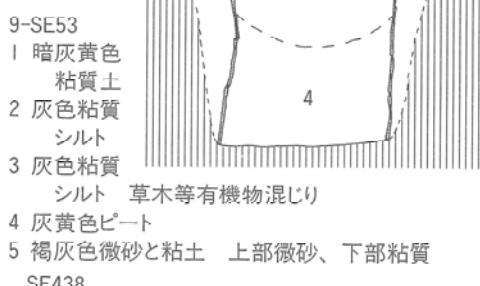
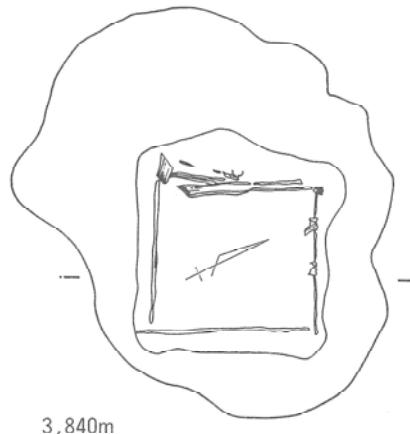
S K 698土坑

B区南西半部、6-Jグリッドで検出された。SB1の東側、畝状溝跡群の南側に位置している。平面形は隅丸長方形と考えられるが西辺が不整である。中央から北半ではSX697に切られて上部が削られていた。大きさは長径3.56m、短径1.55mで、確認面からの深さは27cmである。掘り方は浅く、緩やかに傾斜した後急傾している。底面には長さ84cm、太さ約30cm大の埋もれ木が認められた。覆土は基本的に3層からなり、灰黄褐色粘質シルト層を主とする自然堆積である。遺物は登録数にして20点ほどあり、内訳は須恵器壺5点、蓋2点、コンロ型土器1点他の組成である。その他の種別・器種ではあかやき土器の壺、同甕類の破片資料が幾つか認められた。

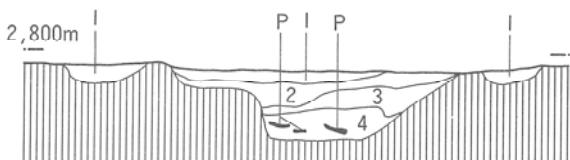
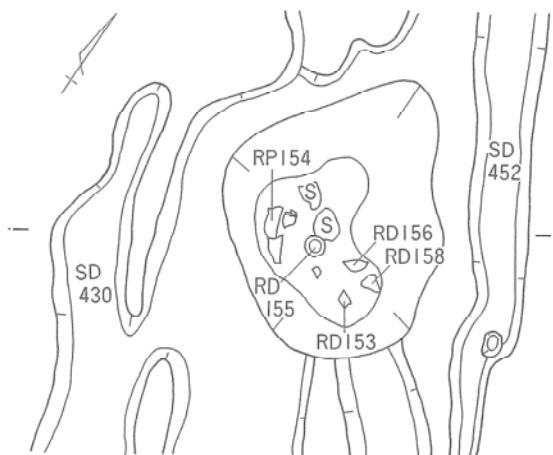
S K 409土坑

A区北東半部、3-Gグリッドに位置し、SG429川跡の南に接している。SK409はSK407を切り、SK407がSP406・SD408・SP410・SP796を切る等の重複関係が認められた。平面形は円形で長径96cm、短径81cmを測り確認面からの深さは14cmである。壁の立ち上がりは緩やかで底面は平坦である。覆土は灰黄褐色粘質シルトの単層で炭化粒や遺物を多く含んでいた。遺物は覆土中や底面から支脚・あかやき土器小型甕・須恵器甕の破

T19-SE53



SE438



SD430

1 灰黄褐色砂質シルト(I0YR6/2) 炭化粒を若干含み、酸化鉄の塊を含む。

SE438

1 灰黄褐色粘質シルト(I0YR6/2) 炭化粒を若干含み、酸化鉄・砂もやや含む。

2 灰褐色微砂(I0YR6/2) 炭化粒を若干含み、1層目との間に酸化鉄層があり、色調がオレンジがかる。

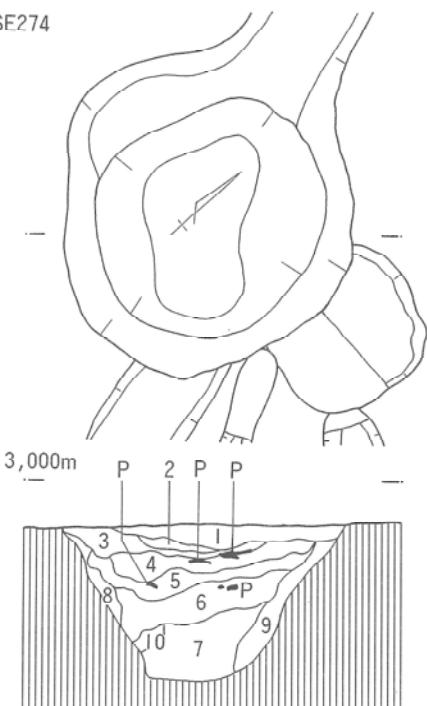
3 灰褐色粘質シルト(I0YR6/2) 炭化粒を若干含み、2より鉄分は弱い。砂質を若含む。

4 灰色粘土(I0Y5/1) 炭化粒の塊を含み、土器片を含む。鉄分あり。

SD452

1 灰黄褐色粘質シルト(I0YR6/2)

SE274



SE274

- 1 褐灰色シルト(I0YR5/1) 炭化粒を若干含む。
 - 2 褐灰色粘質シルト(I0YR5/1) 酸化鉄を含み、しまる。
 - 3 灰黄褐色粘質シルト(I0YR5/2) 炭化粘を若干含み、しまる。
 - 4 灰色粘質シルト(I0Y5/1) 炭化粒を2,3含み、土器片を含み、酸化鉄を多く含む。
 - 5 層との間に酸化鉄層がある。
 - 5 灰色粘質シルト(I0Y5/1) 炭化の塊を若干含み、4よりやや暗い。
 - 6 灰色粘質シルト(I0Y4/1) 炭化の塊を多量に含み、土器片を多く含む。酸化鉄あり。
 - 7 灰色粘質シルト(I0Y5/1) 炭化の塊を若干含み、木片を含み、上面に酸化鉄の塊あり。
 - 8 灰色小砂(I0Y4/1)
 - 9 褐灰色小砂(I0YR5/1) 酸化鉄を含む。
 - 10 灰色粘質シルト(I0YR4/1) 炭化粒を含む。
- 7 より色調暗い。

0 1m

(1 : 40)

第5図 T9-SE53・SE274・SE438井戸跡

片、あかやき土器甕類の破片が出土している。

S X 180落ち込み遺構

A区中央西半部、1-Eグリッドで検出された。SK181土坑を切り、SD178に西接する重複関係が認められる。形態からは土坑と云うより溝状遺構に近いと考えられる。長軸4.7m、短軸1.6mを測り、確認面からの深さは14cmである。壁は浅く緩やかで底面は平坦となる。覆土は褐灰色粘質シルトの単層で、自然堆積と考えられる。遺物は底面直上に須恵器壺の同一個体片が散らばった状態で出土した他、須恵器壺・同台付皿、内黒土器壺、土師器甕などが認められた。

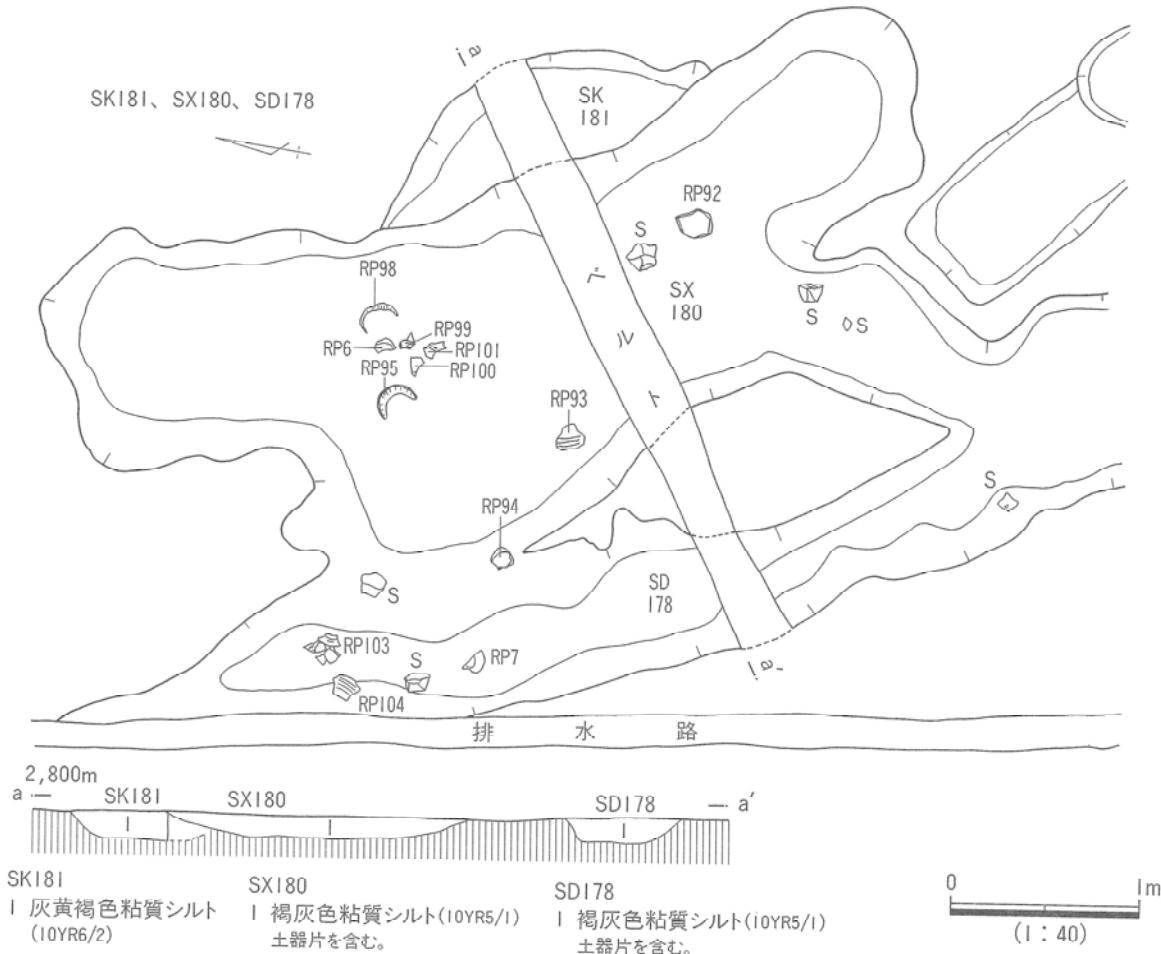
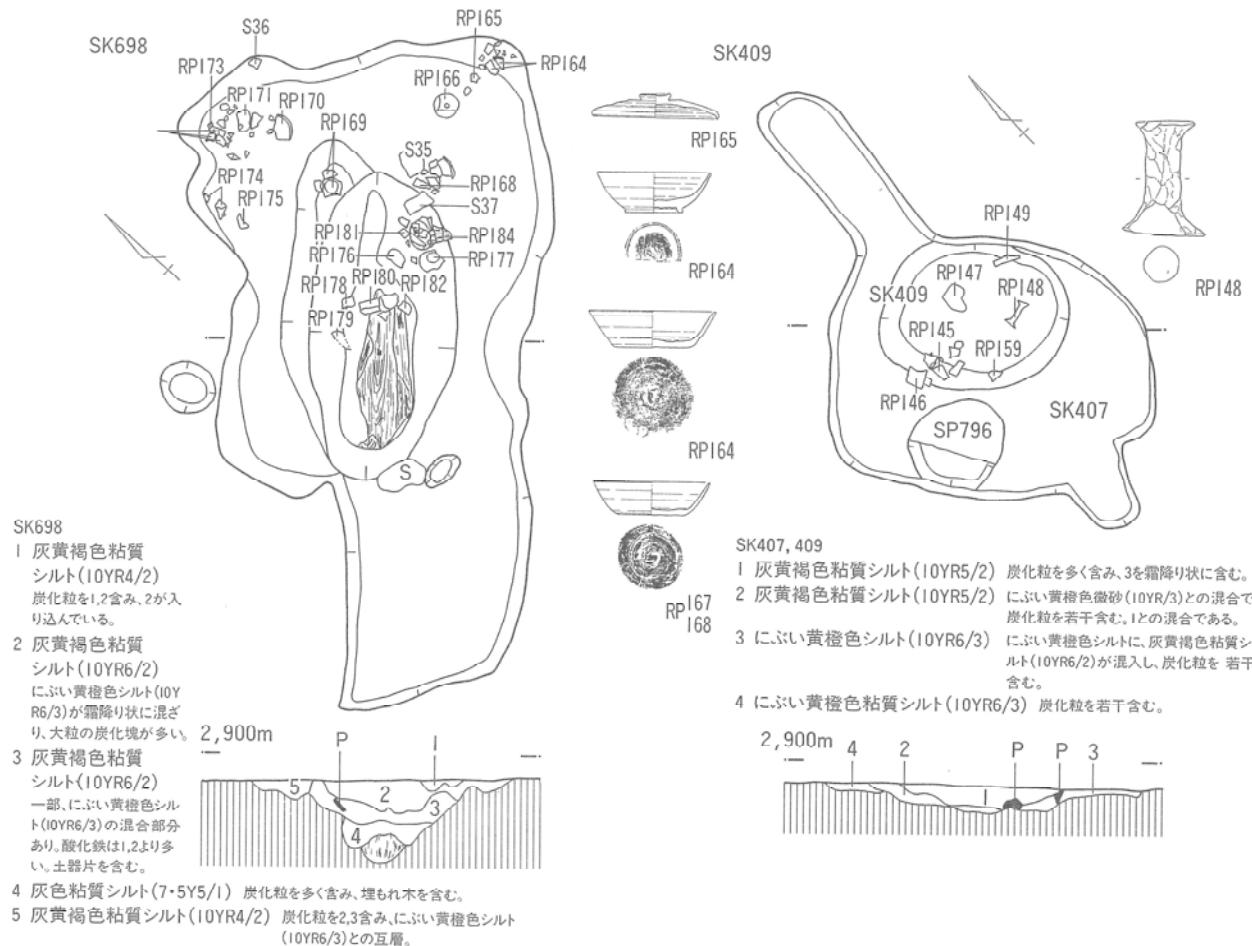
4 河川跡（第7～10図）

規模の小さなSGを含めて二条を検出した。以下に主体的なSG19について説明する。

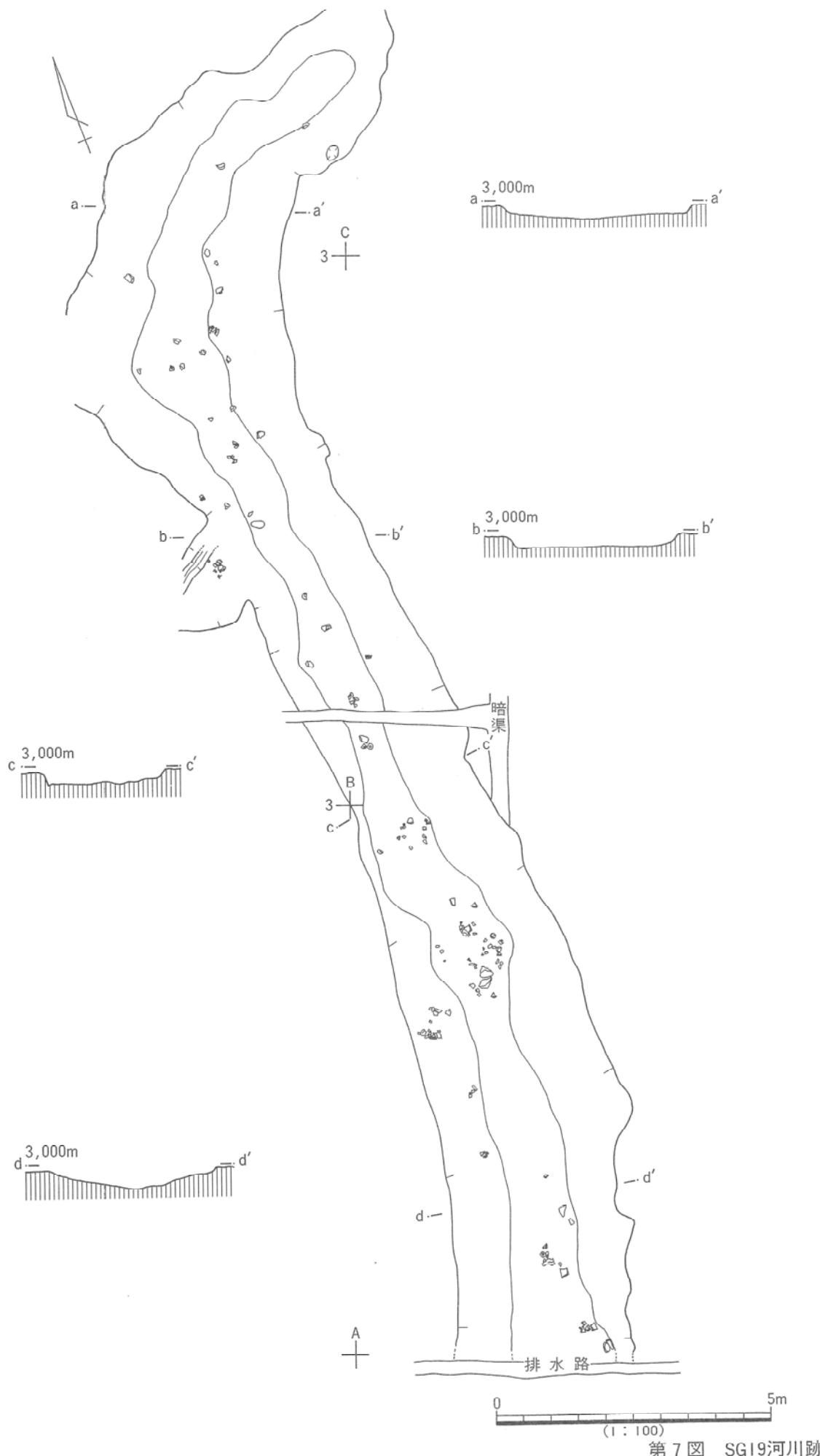
SG19はA区中央から南半の2～3-A～Cグリッドに位置し、北接する畝状溝跡群とほぼ同方向で南北に延びている。北端で東側に折れ曲がって立ち上がり、途切れた格好となるが、浅くなつて溝跡群の南辺に沿つて走行していたと考えられる。規模は長さが25.5m以上、川幅の最大4.3m、最小2.2mであり、深さは22～34cmである。壁はやや急傾で立ち上がり、ほぼ平坦な川床が緩い南側への傾斜をみせていた。レベル差から南流した河川と推測される。覆土は粘質シルトの自然堆積層である。遺物は上位から中位にかけて多く分布し、登録遺物に限つても80点を数える。器種はヘラ切りの須恵器壺を中心に、同甕・壺、あかやき土器壺・甕、土師器甕、内黒土器壺、コンロ形土器などが認められた。

5 畝状溝跡群（第11～14図）

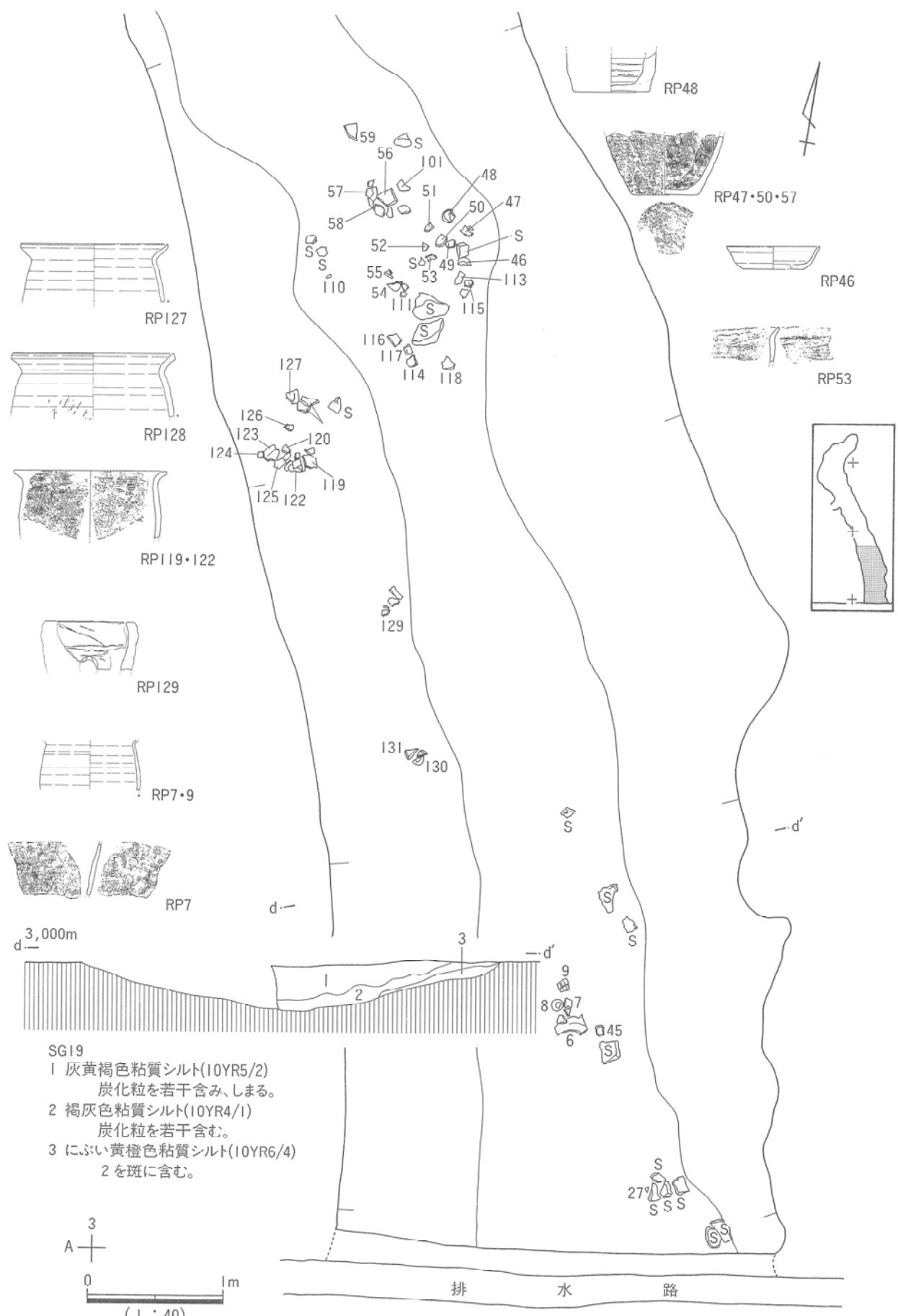
畝状溝跡群と呼ぶ細長い溝跡群は幅30～40cmの規模で、畑の畝様に同じ長さ、同じ間隔で並走する数本から数十本を一単位とする溝跡群である。分布から大きく5群に分けられた。1群はA区中央部、1～3-C～Eグリッドで検出された一群である。SG19と同方向の北西（N-25° 70' -W）に延びる溝跡群で、数時期の重複が認められる。溝は見かけ上15mほどの全長と窺えるが、本来的には長さが概ね10m内外で10数本が一単位を構成するものの重複と考えられる。少なくとも3時期の新旧が捉えられるが覆土・地山共に砂層のため単位毎のまとまりを明らかにするまでには至らなかった。2群は同区北半部、2～3-Fグリッドに見られたもので、間隔の広い溝跡群が北西（N-23° 10' -W）、西北西（N-60° 10' -W）、北（N-7° 10' -W）の各走向で交錯している。この新旧は先の記載順に新しいと推定される。3群は同区北辺部1～2-G～Hグリッドに位置し、SG429と同方向の北西（N-29° 70' -W）に向かう、1群と同様の重複が認められた。4群はB区西南半部の5～6-J～Kグリッドに位置し、建物跡と同様の北西（N-13° 00' -W）方向に軸を取るものである。幅30～60cm、長さ6m前後の17条の溝跡で構成される。5群は北東半部、7～8-L～Mグリッドにあり、ほぼ磁北（N-1° 70' -W）方向で、東側の低湿地と平行して走行している。長さ7m前後で10数本を一単位として構成される。これらの覆土は概ね汚れた砂質シルトの単純層で、地山との区別が非常に困難なものであった。



第6図 SK698・407・SX180土坑

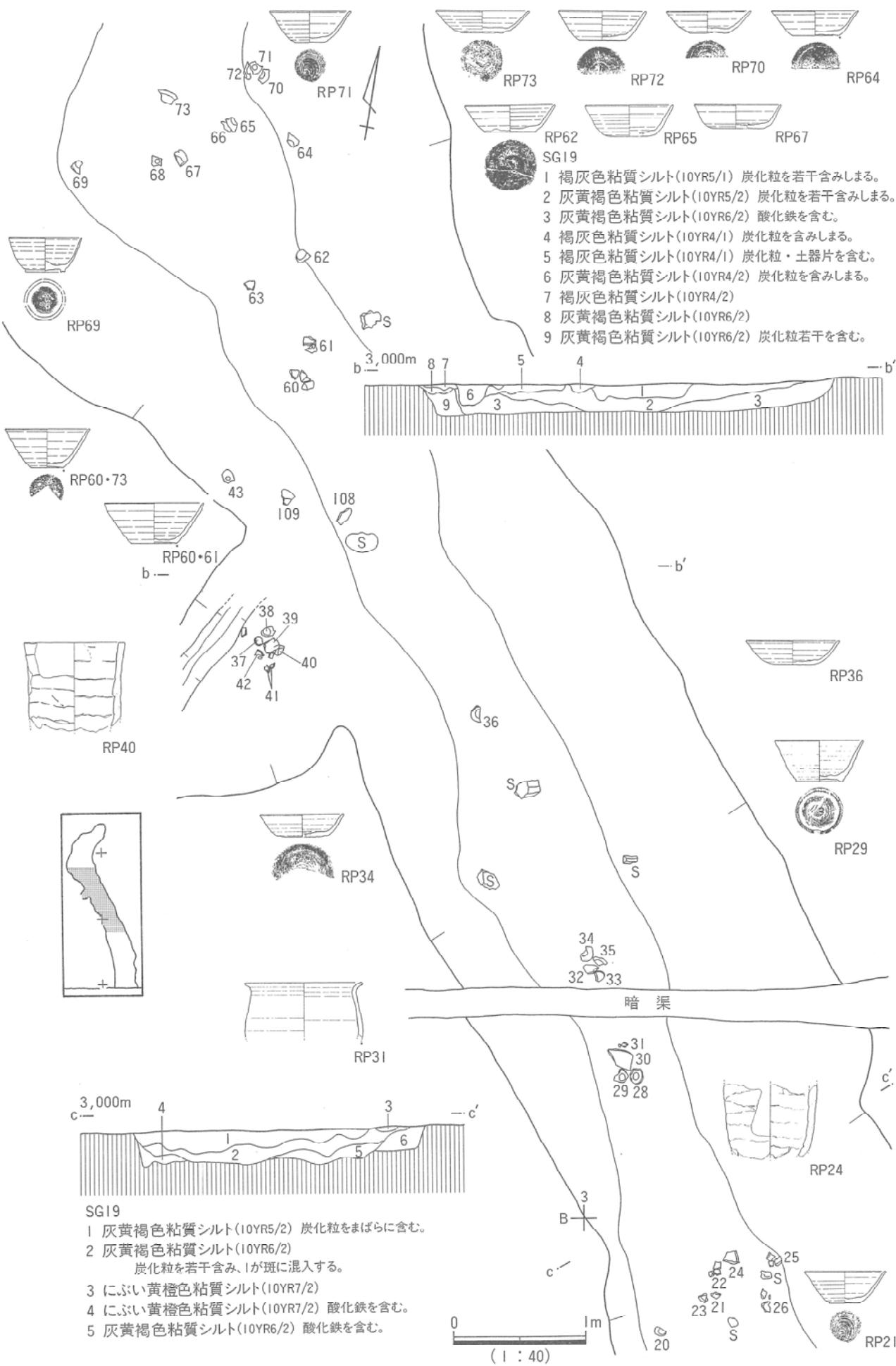


第7図 SG19河川跡



*数字はRP番号を表わす。

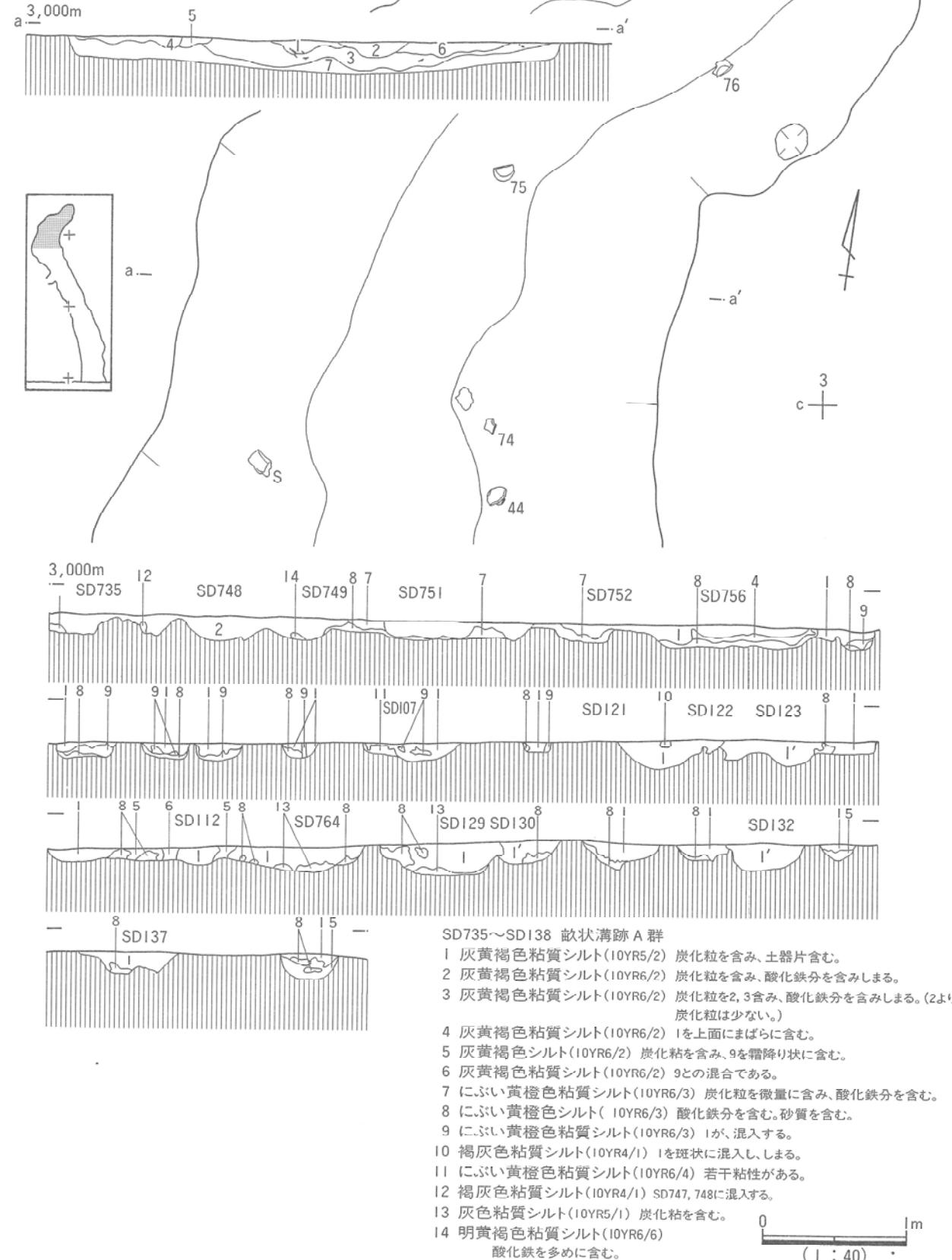
第8図 SG19河川跡



第9図 SG19河川跡

SG19

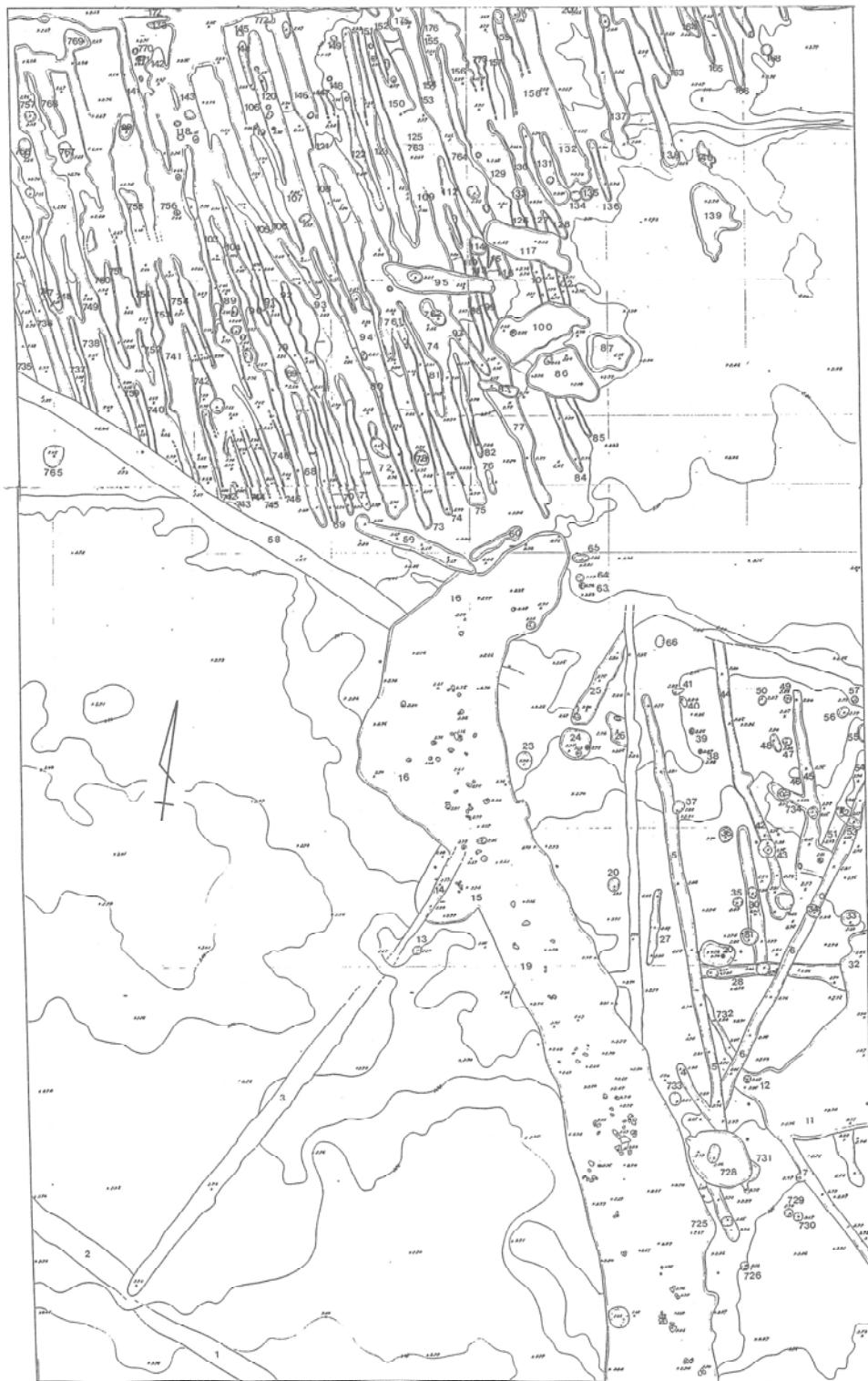
- 1 灰黄褐色粘質シルト(I0YR4/2) 炭化粒を2,3含み、火山灰粒を含み、しまり、土器片を含む。4を斑状に含む。
- 2 灰黄褐色粘質シルト(I0YR4/2) 炭化粒を2,3含み、しまる。
- 3 灰黄褐色粘質シルト(I0YR5/2) 炭化粒を多く含み、火山灰粒を含み、しまり、土器片を含む。
- 4 灰黄褐色粘質シルト(I0YR6/2) 炭化粒を2,3含み、しまる。
- 5 にぶい黄橙色粘質シルト(I0YR6/3) 炭化粒を2,3含み、しまる。
- 6 灰黄褐色粘質シルト(I0YR5/2) 炭化粒を若干含み、しまる。
- 7 灰黄褐色粘質シルト(I0YR6/2) 炭化粒を2,3含み、酸化鉄を含む。



第10図 SG19河川跡、敵状遺構A群

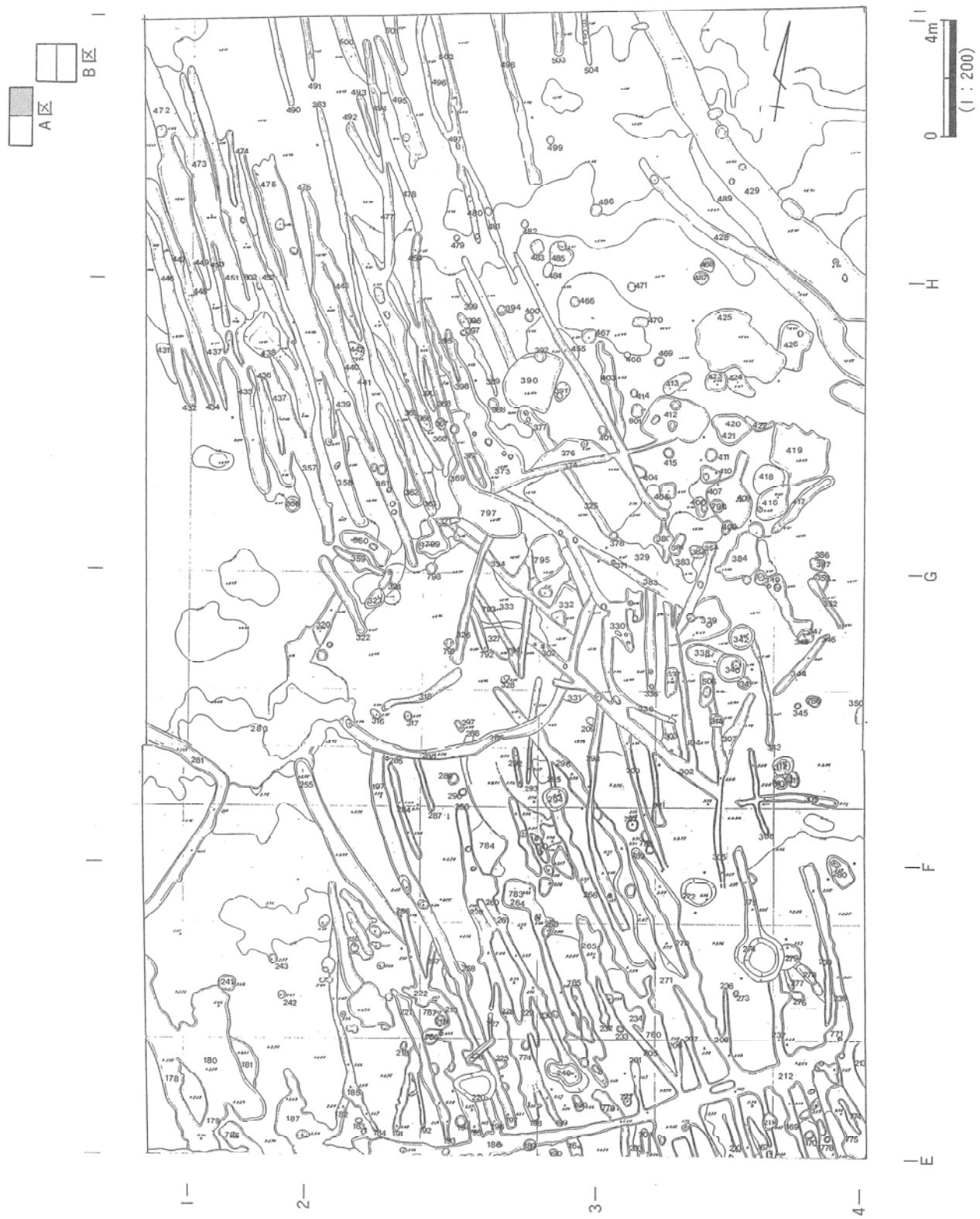
A区
B区

E
4m
0 (1 : 200)

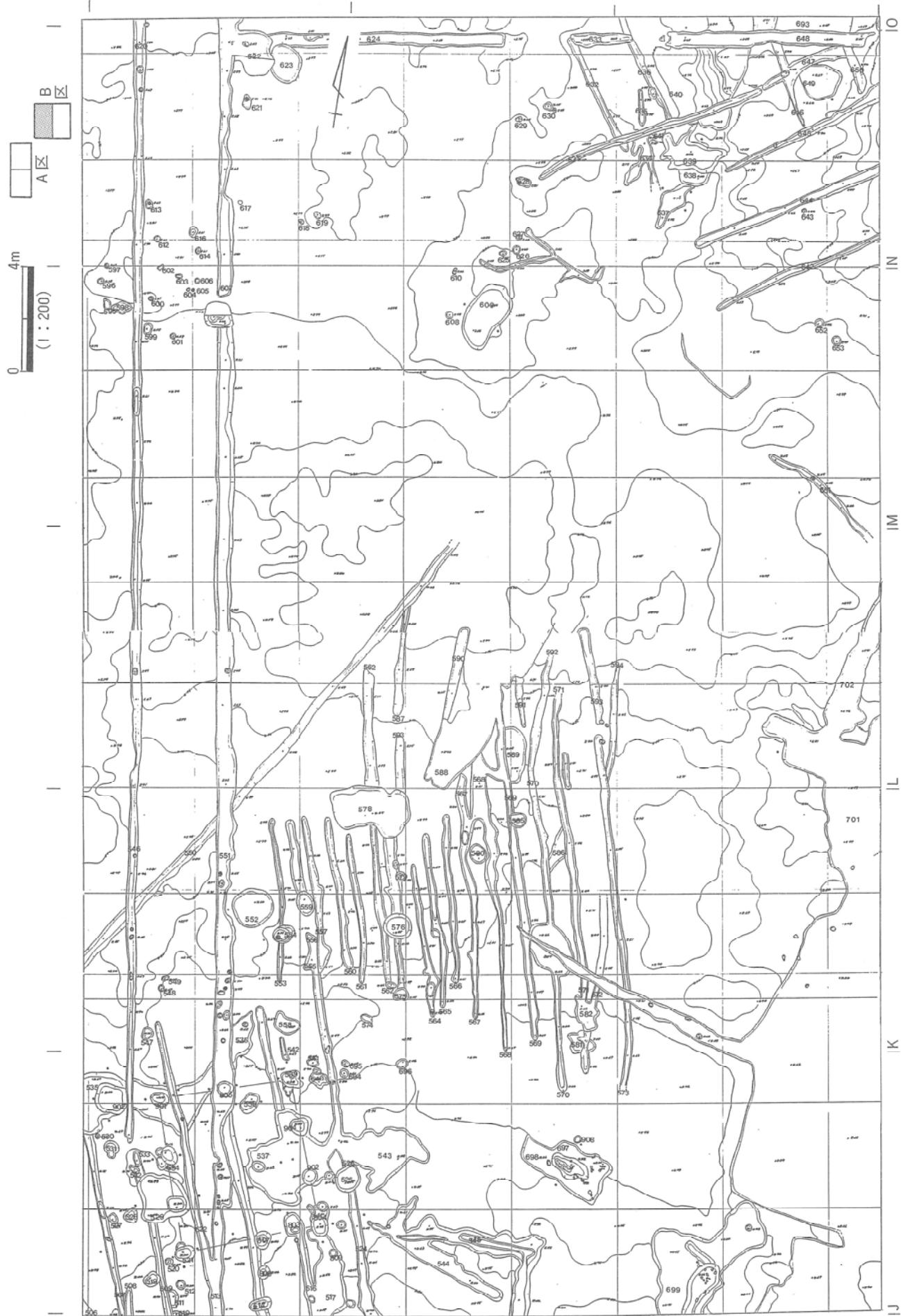


— 1 —
— 2 —
— 3 —
— 4 —

第II図 遺構平面図 (1)



第12図 遺構平面図 (2)



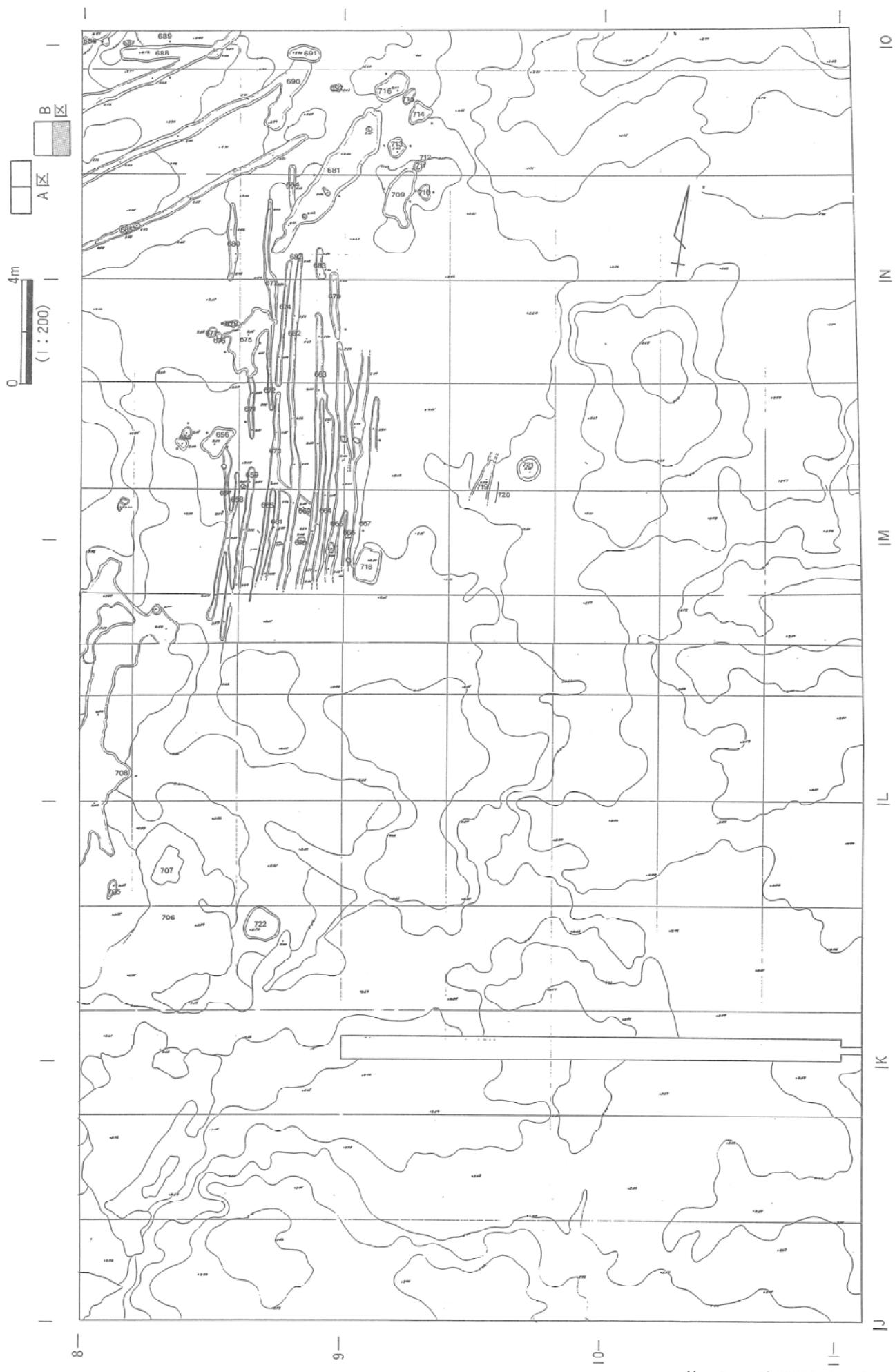
5

6

7

8

第13図 遺構平面図（3）



第14図 遺構平面図（4）

VI 出土遺物

1 土 器

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約26箱ほどである。これらは河川跡、土坑などを中心として検出されたもので、須恵器・あかやき土器・黒色土器・施釉陶器・製塙土器などの主に平安時代に帰属する土器群が大半を占めた。

土器群の内訳は分析対象とした主要な資料に限れば、須恵器53%、あかやき土器31%、土師器16%となり、概観的には「須恵器主体、あかやき土器の量的増加、土師器の定率組成」等の特徴が指摘できる。以下ではこれら土器群について、一部の器種分類を行なながら遺構単位での組成内容を中心に概述する。

S G19河川跡の組成（第15図8～第16図28）：登録80点ほどの内、図化できた資料は須恵器壺類他が25点・あかやき土器13点・土師器7点・製塙土器4点である。種別の構成は上記比率と同様の傾向と窺えた。須恵器は壺類を中心に高台付壺・蓋・壺などの器種が認められる。壺は形態と法量から以下に記す1～4類が識別された。A 1類（第16図21）：底径が8cm以上で、外傾度の小さい箱型を呈す一群。A 2類（第15図8・26・27、第16図17、第19図11）：底径がA 1類よりやや小さく、外傾度が幾分大きくなって直線的外傾を示す一群で、底部と体部の境界が丸みをみせる一群。A 3類（第15図8・第16図7・14・16・23）：深身の形態で、切り離し面がA 2類よりやや小さく、体部の長く延び出す一群。A 4類（第15図14・第16図9・22・27）：底径が6cm前後的小形で、内湾気味に立ち上がる口縁が強く引き出されて開く一群。以上は切り離しがすべてヘラ切りのものである。量的にはA 2・A 3類が主体を占め、次いでA 4類、A 1類の順で構成される。一方、底部の切り離しが回転糸切を示す一群があり、法量や形態から以下の2類に細別される。A 5類（第15図13）：A 4類に器形・法量共に類似する形態で、切り離しが回転糸切りとなる一群。A 6類（第15図12・第16図8）：底部が小径で体部がやや内湾して立ち上がる比較的器高の高い一群。これら糸切りの壺類は量的には僅かであり、主体となるヘラ切りの一群と一部併存ないしやや後続のものと考えられる。

高台付壺は深身の大型品（第15図9）と口径10cm内外を示す中型品（第16図13）の二種に大別される。一方、これらに組み合う蓋類は径が16cm内外と大振りな山笠型の第15図15や平笠型の第15図16などのほか、小形の短頸壺に伴うと考えられる第15図23の類型が各1点づつ認められた。

あかやき土器は器種的に壺と甕の二種がある。壺は器形他からB 1・B 2類の二種に分類され、さらに形態から細分されるが何れも量的には僅少である。以下に列記する。

B 1a類（第15図25）：須恵器壺A 1類と同様の器形を示すが、酸化焰焼成で胎土に砂粒を含み軟質である。B 1b類（第16図24）：須恵器壺A 3類に器形・技法共に共通する一群で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。B 2a類（第16図10・18）：口縁が内湾ないしほぼ直線的に立ち上がり、底径が口径の4割強を占める大形の一群。B 2b類（第

15図17・第16図20・25)：口径が12~13cm程の小形で深身の一群。B 3類(第16図11)：底径が小径化し外傾度が増大して口縁の開く一群。なお、第16図20には「前」の墨書が認められる。

土師器の供膳形態では有台の内黒椀C 3類(第15図20)1点がある。SD180(第17図3)に見られた「蛇の目高台」風の有台内黒椀C 2類に後出の形態と考えられる。

一方、煮炊形態ではあかやき土器甕と土師器甕がほぼ半々の比率で出土しており、煮炊形態器種においてもあかやき土器の普及し始める段階での様相と理解される。あかやき土器甕は口縁が「く」の字形に成形されて口唇が摘まみ上げられるもの(第15図28・29)や、先端を強く摘んで直上ないし内傾させる第15図18などの一群がある。なお、SD724の鍋(第19図20)なども、口縁部の形態から見て本類と同時期の所産と推測される。

その他の遺物としてはコンロ形土器4点が注目される。円筒形の平底で、輪積み痕を明瞭に残す成形技法が特徴的に認められるものである。全体に赤色化して強い二次的加熱の形跡が窺われ、積み上げ部分で剝離する脆いものや焼締って硬く重量の重いものなどがある。第16図5は体部中位に円窓となる透かしが穿たれていた。

以上の土器群は分類からも明らかなように单一時期のものとは考えられず、組成的にはある時間帯の中で形成された数時期に及ぶ混在的様相と判断される。ただし、SG19河川跡そのものの主たる時期は単純な量比だけを根拠とすれば須恵器壺A 2・A 3類に代表される段階と考えられる。

SD180溝跡の組成：図化できた資料は須恵器、土師器等4点(第17図3~5・10)である。器種的な欠落が多く全体が明らかでないが、須恵器壺はA 3類で、灰釉陶器を模したと考えられる須恵器の高台付皿を伴っている。土師器の有台内黒椀は底部の外周をつまみだすようにして付けられる高台に特徴が見られ、有台形態とすれば古い段階のものと判断される。須恵器長頸壺は体部上半に最大径を持つ球形で、体部は中位から下半部が回転ヘラ削りで調整される。

SD212溝跡の組成：図化できた資料は各種の供膳形態を中心に8点(第17図11~18)がある。壺類の底部切り離しはすべて回転糸切りである。あかやき土器壺は口径12cm内外、底径が約6cmほどのものが大半で、体部内湾で立ち上がる形態のB 2b類が主体を占めた。第17図17は体部下間に回転ヘラ削り調整の施される希有な例である。須恵器長頸壺はやや肩の張る形態で、肩から頸部までが三段構成で形成されており、古相を示す。

SD698溝跡の組成：20点ほどの個体が出土しており、一括遺物としては本遺跡でもまとまった例である。図化できた資料は10点(第18図22~28・第19図1~4)であるが、供膳具の須恵器壺類が中心で煮炊形態が欠落している。須恵器壺は法量の大きいA 2類(第18図27・第19図2)が主体となり、これに口縁が内湾するA 4類(第19図24)が若干加わっている。蓋は単純な折り返し口縁の山笠型(第18図23)と大振りな平笠型(第18図25)が供伴している。

あかやき土器壺はB 2b類(第18図22)で、やや口縁の外傾度が増加している。これら

の組成は全体に S D 180での状況にほぼ近いと判断される。

S X 701落ち込み遺構の組成：図化し得た資料は 6 点（第19図 5～6）である。あかやき土器壺は B 2 a類（第19図13）と形態が須恵器壺 A 3 類に近似するヘラ切りの B 1 類（第19図 6）がある。煮炊形態ではあかやき土器鍋があり、口唇部の強い摘み上げに特徴が窺えた。須恵器の供膳具が明らかでないため時期的帰属が判然としないが、あかやき土器鍋の特徴から S G 19（第16図18）の一部や S D 274の様相に近いと推測されよう。須恵器壺類の共伴があるとすれば A 2・3 類段階のものと考えられる。

S D 724溝跡の組成：煮炊形態を主に 7 点（第19図11・12・15～20）が図化できた。「く」の字状に外反する口縁の土師器甕は、口唇を摘み上げて外側に平滑な面を作るもので、体部の内外面は目の細かい刷毛目調整が施される（第19図9）。また、あかやき土器甕（第19図20）・鍋（第19図18）類は S X 701での様相に共通し、口唇端部の強い摘み出しに特徴の認められるものである。なお、須恵器壺は底部の切り離しがヘラ切りで、器高が低く体部やや外傾の A 2 類である。

遺構外出土の土器：遺構プラン検出までの段階で包含層から施釉陶器 2 点が出土している。第19図28は灰釉陶器の皿である。断面が方形に近い所謂角高台が付き、口径15.8cm、高径 8 cm、器高2.8cmの法量がある。釉は内面の全面に流し掛けで比較的厚く施され、底面と体部下半には回転ヘラ削り調整が認められる。これらの特徴から本例は東海地方猿投窯の黒窓14号窯式に比定される。第20図21は軟陶の緑釉陶器碗である。白磁碗を模した所謂蛇の目高台の付く形態で、内外面には丁寧なヘラミガキが認められる。釉は内外面共に施され釉調は淡緑色を呈す。平安京近郊の機内産と推定され時期的には 9 世紀前半代が考定される。他に目に付いたものでは横瓶や須恵器壺などがある。壺は肩部に隆起線を巡らし、器壁との境にほぼ等間隔で刺突孔が穿たれる加飾壺である（第20図22）。

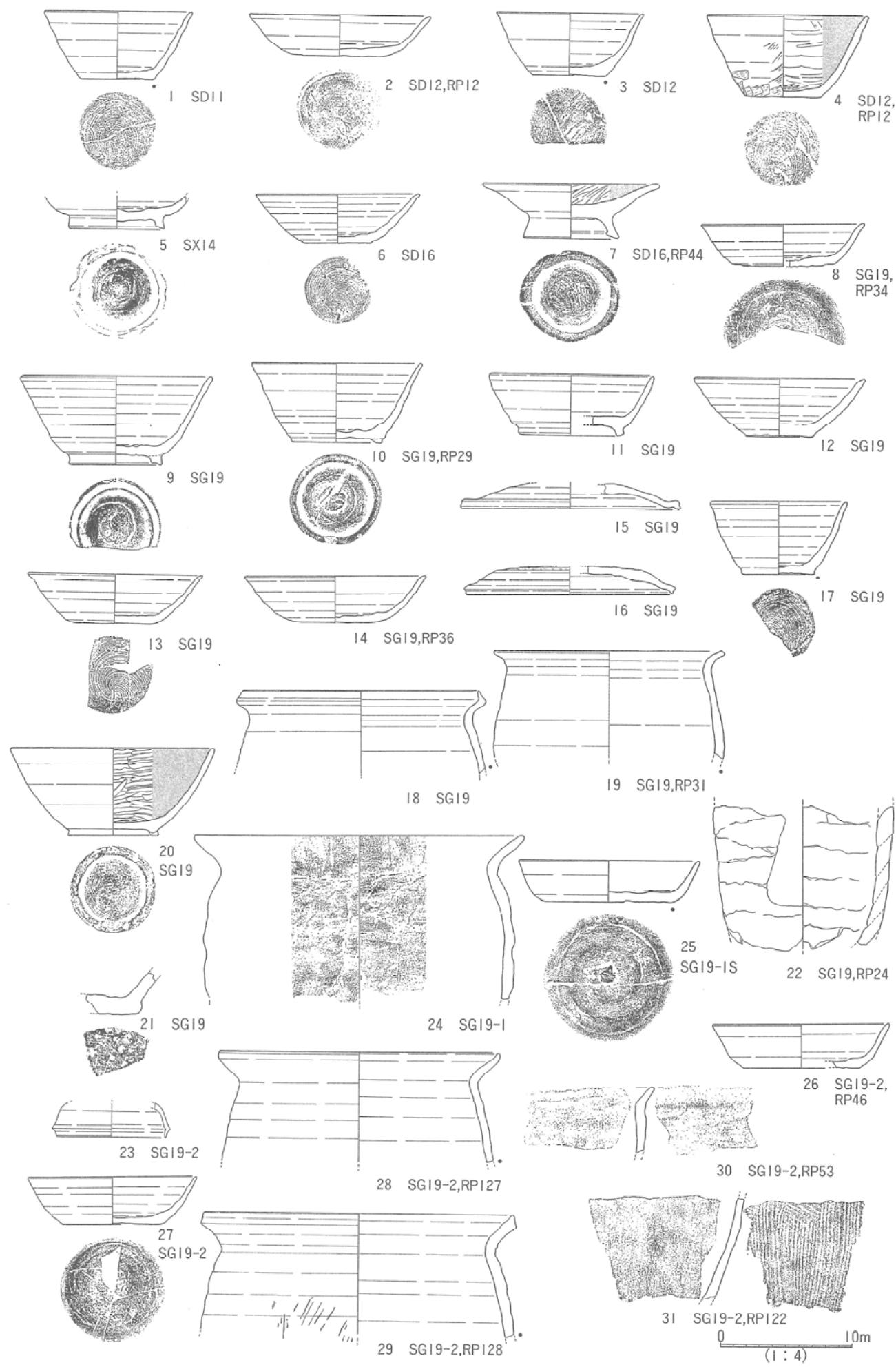
墨書き土器は10点ほどで、文字の識別できたものは「平」（S X 53）、「田中」（S D 503）・「家」（S X 702）・「千」（包含層）の用例が各 1 点づつであった。

2 木製品・土石製品

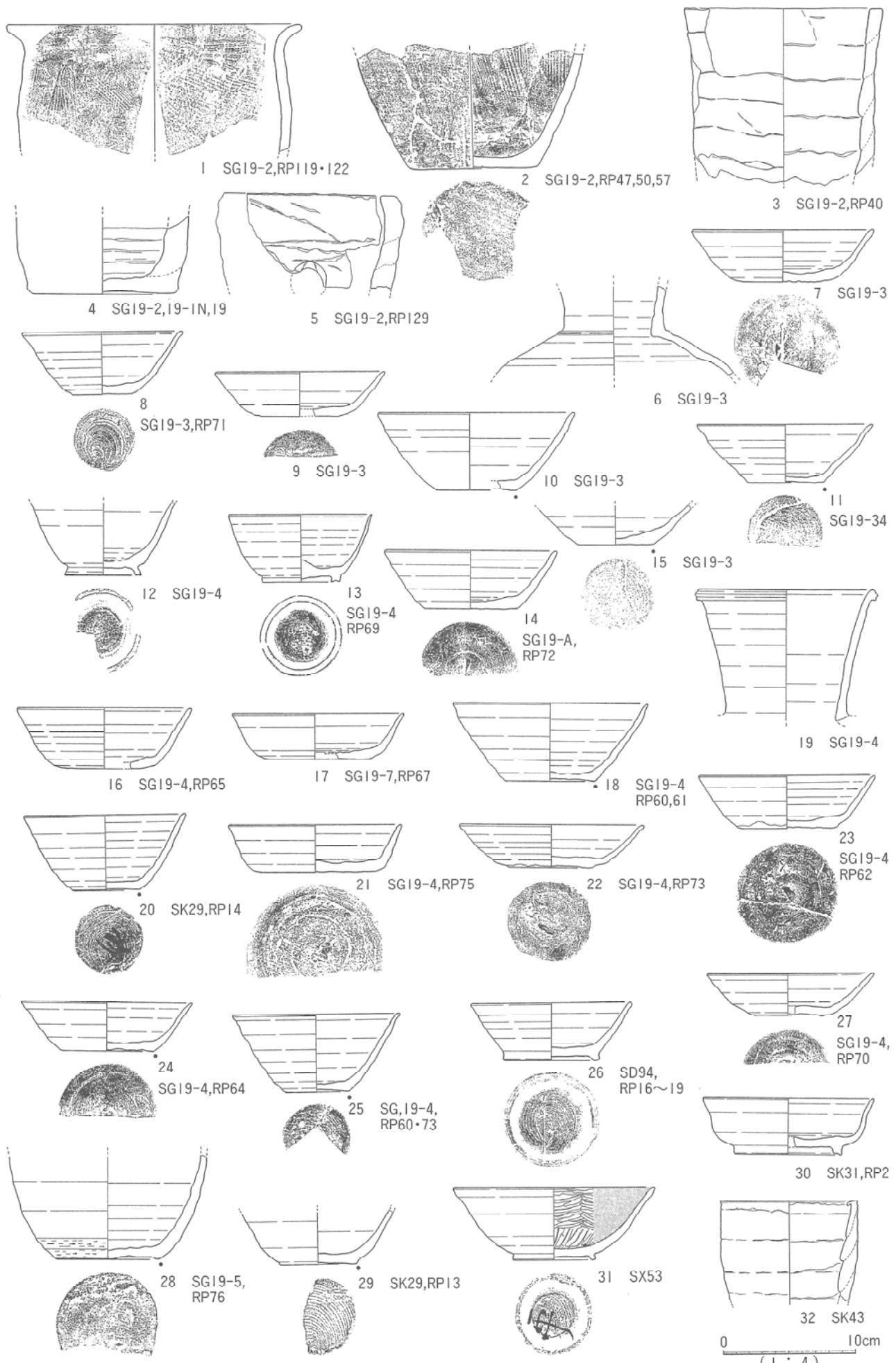
木製品は S E 30 の井戸枠部材 20 本に限られる。材は幅 20～24cm、長さ 1.2m、幅 8 cm 前後の規格性が認められ、両側端に枠組用の切り込みが入れられている。表裏面共に手斧による丁寧な削りの整形痕が認められた。なお、樹種は杉との鑑定結果がでている。

土製品では棒状の支脚（第18図9）や土錘がある。支脚は S K 409からの出土で、端部が外に引き出されて接地部、受け部共に平坦な円盤に仕上げられる。土錘は手づくねで、長さ 4 cm、直径 1.4 cm の流線形で円孔を持つもの（第19図29）や、半欠の S D 452 例（第18図13）、あるいは大形品が包含層などから出土した。

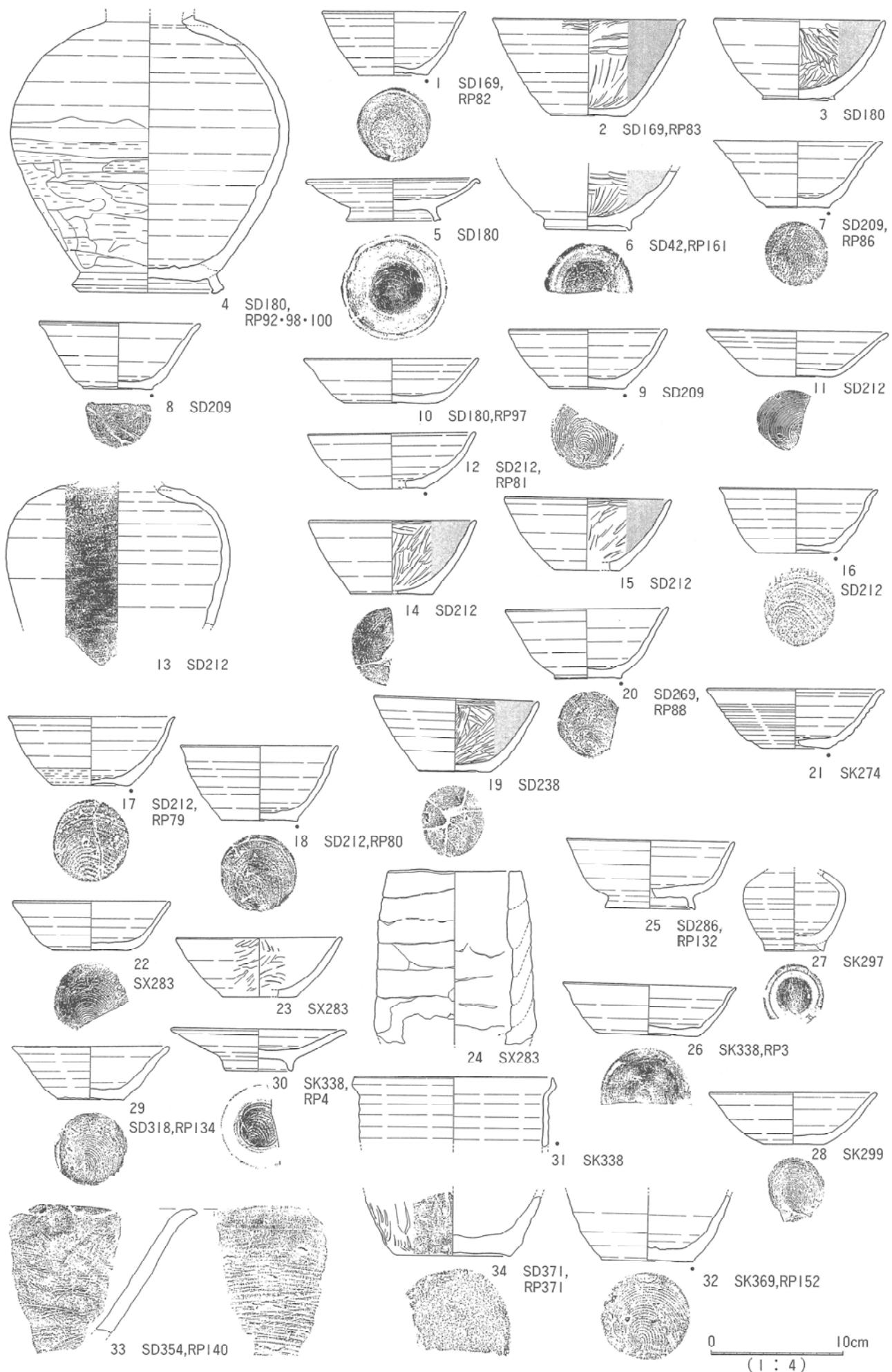
石製品では砥石が S K 411（第18図10）や包含層（第19図22・23・24）から出土している。S K 411 例は各面共に使用されるが、表裏面が特に摩耗していた。22 は凝灰石製で平坦な一面のみが主として利用される。23・24 は安山岩製の小形品である。



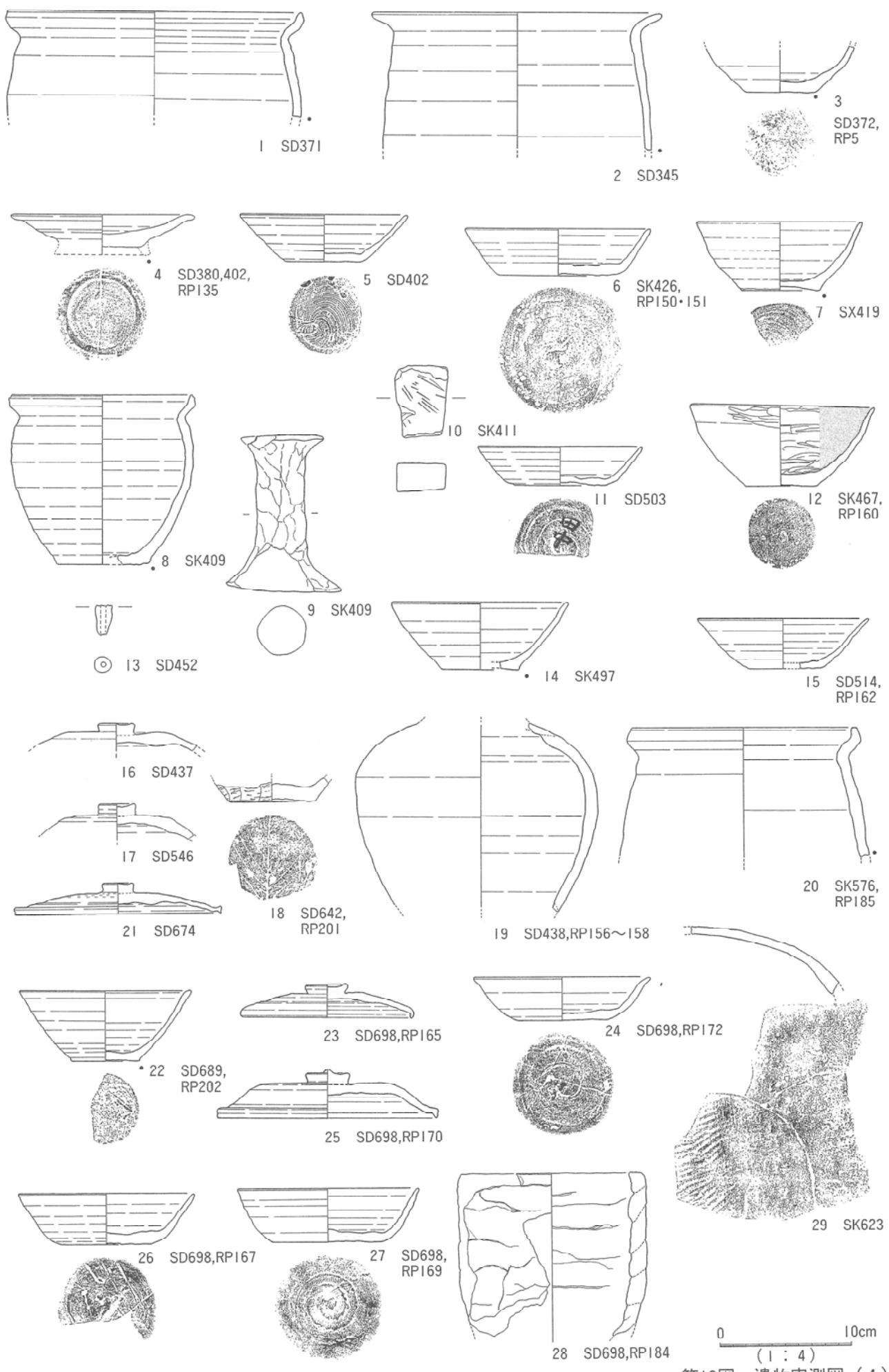
第15図 遺物実測図 (1)



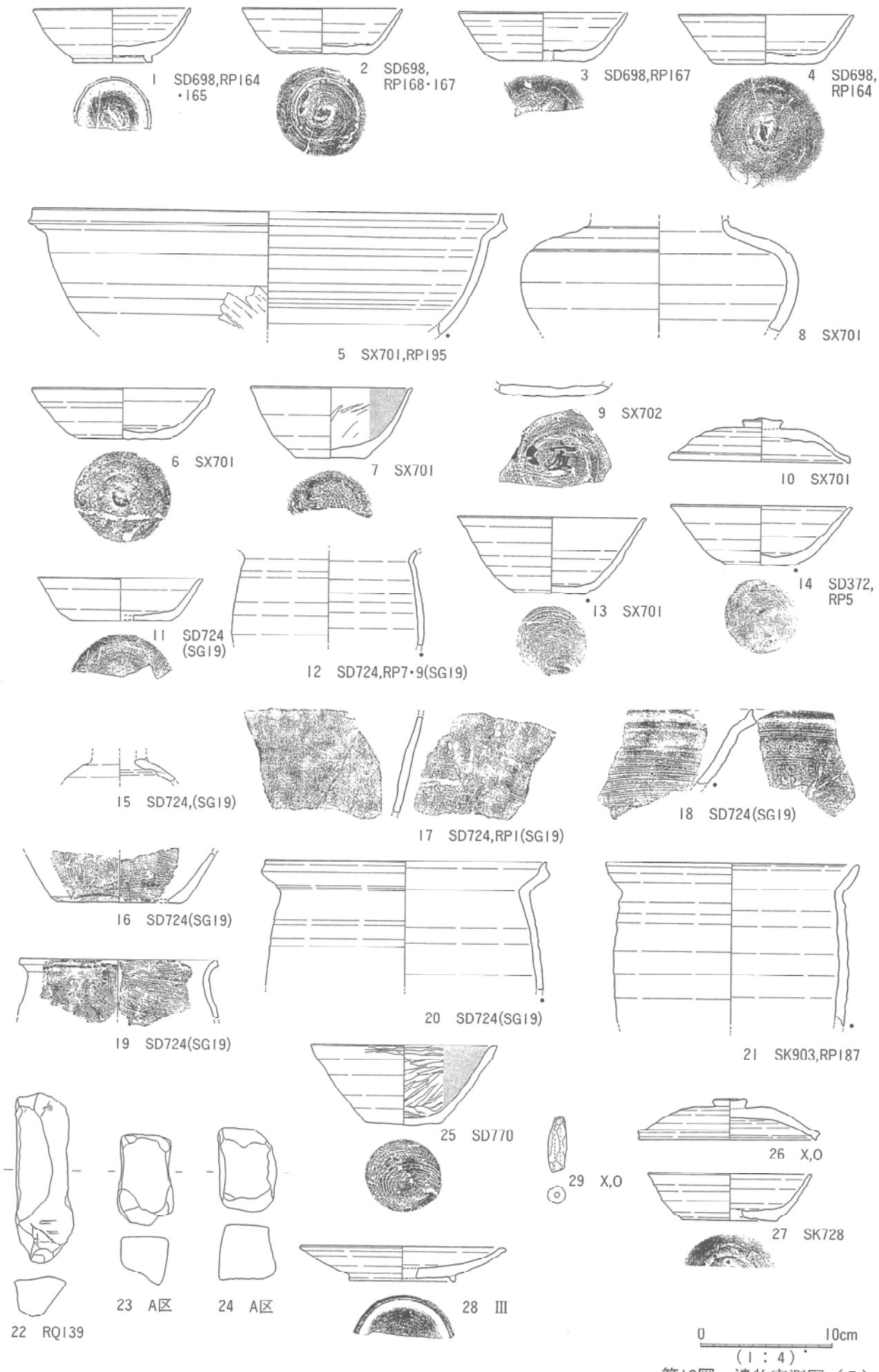
第16図 遺物実測図（2）



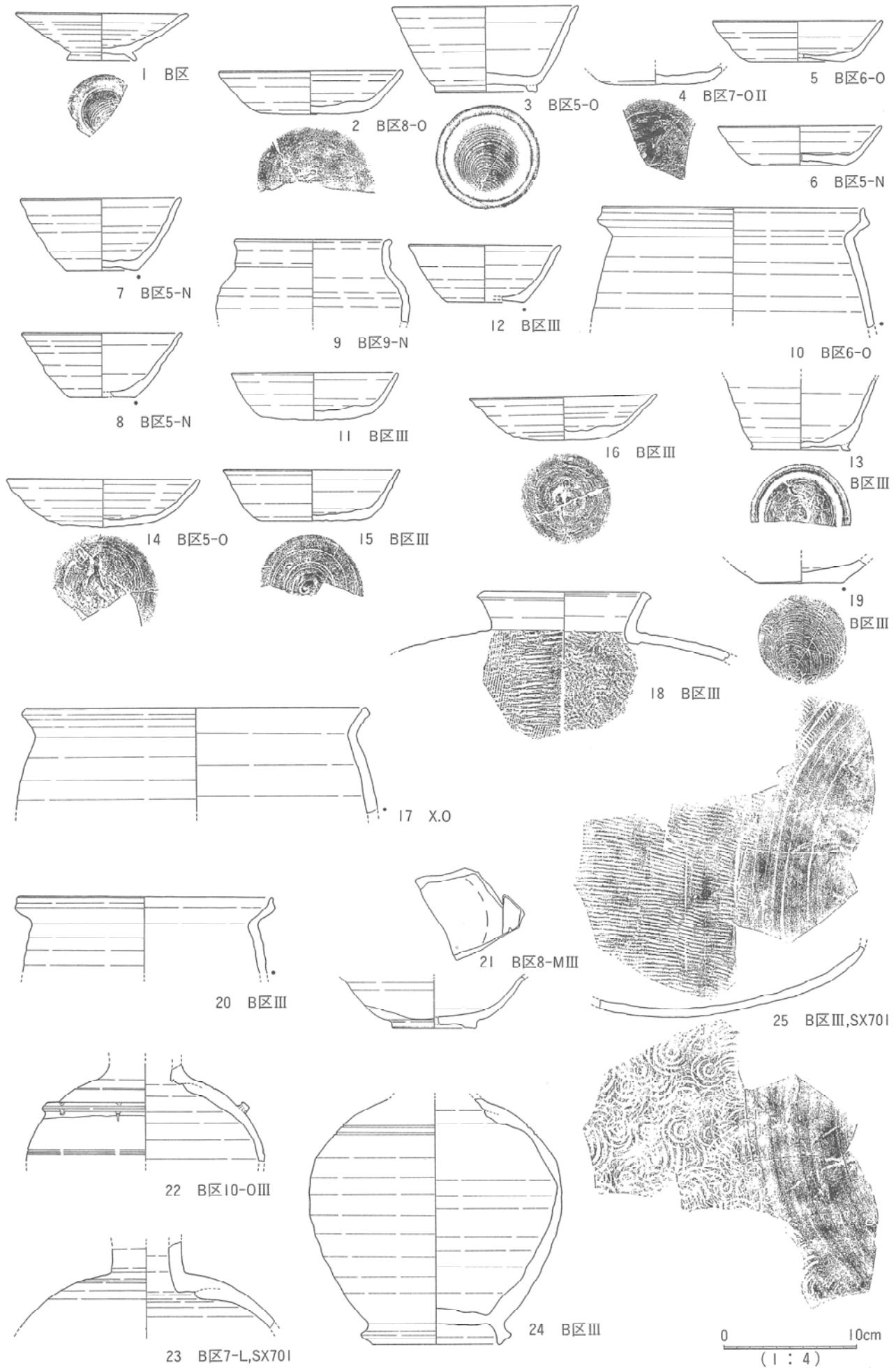
第17図 遺物実測図 (3)



第18図 遺物実測図（4）

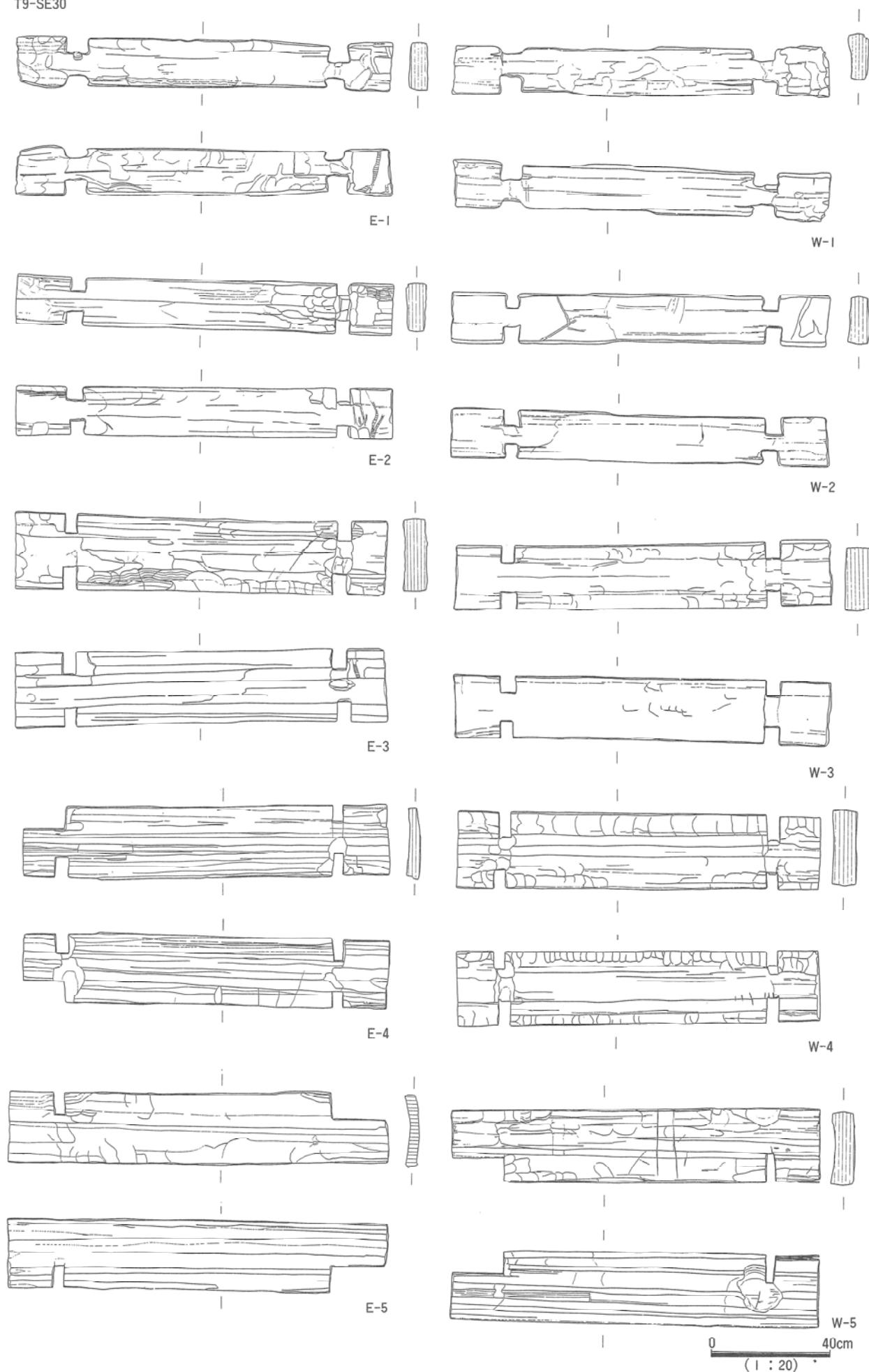


第19図 遺物実測図 (5)



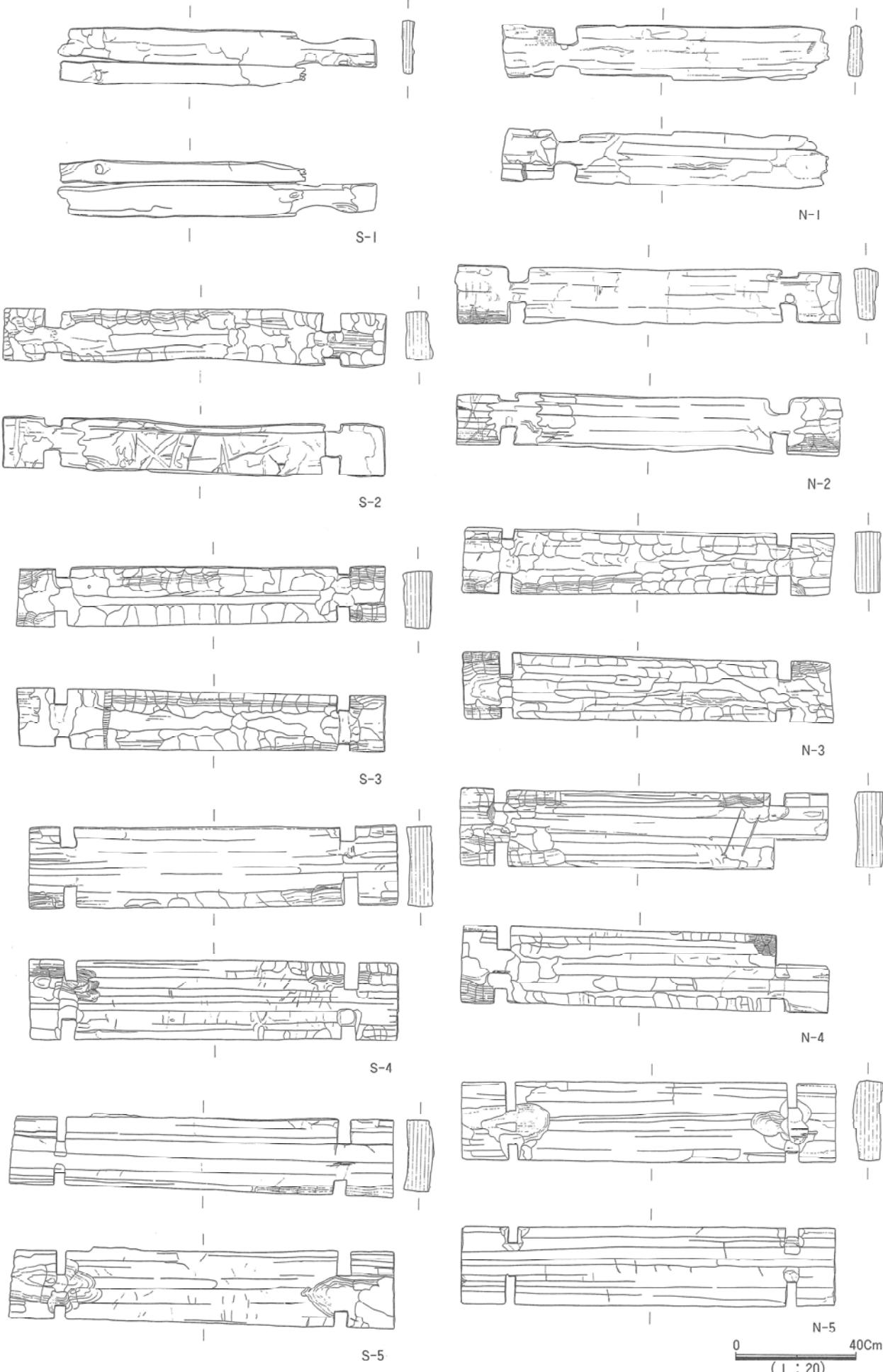
第20図 遺物実測図 (6)

T9-SE30



第21図 遺物実測図 (7)

T9-SE30



第22図 遺物実測図 (8)

VII まとめ

本遺跡の調査では掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・畝状溝跡群等が検出された。特徴的な畝状溝跡群は大別してA区で3群、B区で2群のまとまりと各々識別される。A区では溝跡群の切り合いから少なくとも3時期以上の変遷が捉えられる。土坑は近接ないし重複の位置関係が認められ、総じて溝跡群よりは後出のものが多いと考えられた。また、その分布は溝跡群の分布域を外すか或いはその外縁部に沿って配置されたよう見受けられる。建物跡や柱穴群の分布も土坑群と同様の傾向を示すと判断でき、居住域と生産域との意識的な区画や区分が存在した可能性が推測される。一方、建物跡外の主軸方位と畝状溝跡群の走行方向には相互の密接な関連が窺われ、集落内での企画性が具体的に現わされた結果と考えられた。しかし、調査が部分的で集落の主体部が明確に把握しきれなかったことなどもあり、相互の単位抽出や組合せなど構成の把握までには至らなかった。

遺物では河川跡外から多くの土器類が検出されたが、特にSG19での様相は本遺跡の継続期間全般を包括すると判断される。時期は概ね8世紀後半～9世紀後半に掛かり、主体は9世紀前半期と推測された。また、河川跡や遺構内での壺類は、形態や切り離し技法でヘラ切りから糸切りへと移行する段階の様子が明瞭に看取され、その変換が9世紀第2四半期を含む時期に推移したと考えさせる。すなわち、以下に記すSG19河川跡出土の供膳具分類を軸として得られる大凡3段階の組成変遷である。

1段階：基本的に須恵器壺A2・3類を中心とする土器群でSD724・SD698等にその組成内容が窺われ、9世紀第1四半期を中心とする時期が考定される。

2段階：須恵器壺A4類を中心とする土器群でSD12・180・701等での組成に代表される。時期は9世紀第2四半期が中心と推測される。

3段階：須恵器壺A5・6類が主体となる土器群でSD16・283・212・SK402等に代表される。9世紀第2～第3四半期までの幅が考えられる。

以上の各段階の年代はほぼ9世紀第3四半期までの範疇に収まる近接した時間帯が推定され、形態的には須恵器壺類の底部切り離しがヘラ切り主体の1段階から糸切り主体の3段階へ移行するまでの間と判断できる。また、包含層出土のものながら施釉陶器の年代にも合致する在り方と考えられる。

最後に検出資料を対象として実施した理科学分析の結果を記しておく。平田町山海窯の製品と比較した出土須恵器の胎土分析では、カリ長石・斜長石などの鉱物組成に違いが認められることや高温焼成によるムライト化現象（斜長石の結晶化）が顕著であることなどから原料となる粘土成分が異なること、あるいは産地そのものが異なることが示唆された。また、井戸枠材の樹種同定結果はすべて杉である。なお、井戸枠材を用いた放射性炭素年代測定の結果2000年±70Y（50B.C.）の測定値が得られており、井戸が構築されたと推定される年代とは大きく懸け離れていた。これは井戸廃絶後の埋積土壤中に含まれる放射性炭素が分析試料中に影響したなどの理由が考えられる。

図 版



A区完掘状況・B区SBI（北より）



調査区遠景（南西より）



調査風景（北より）



SBI検出状況（南より）



SBI完掘状況（南西より）



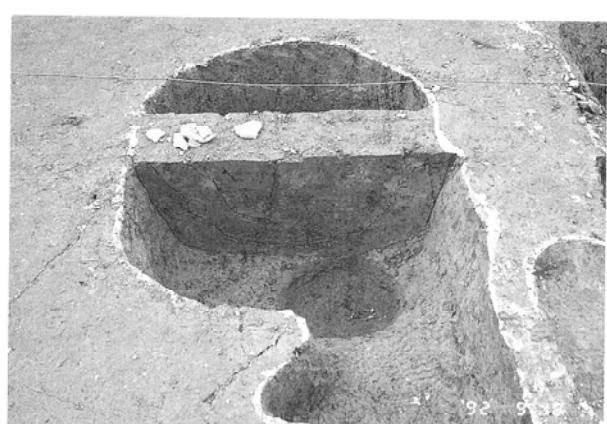
SBIEB529土層断面（南より）



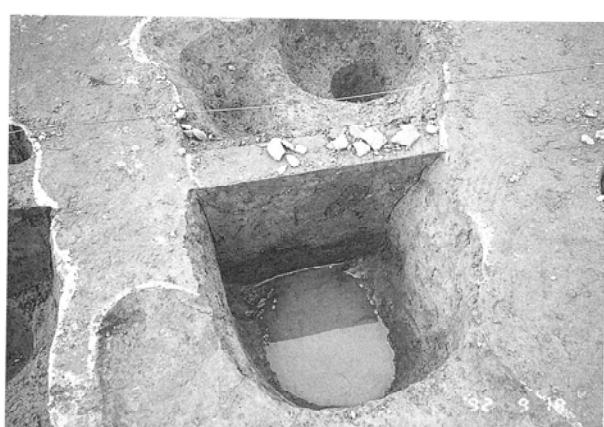
SBIEB539土層断面（南より）



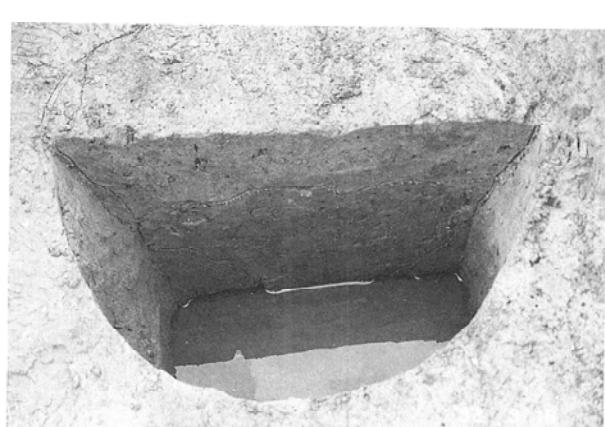
SBIEB534土層断面（南より）



SBIEB803土層断面（南より）



SBIEB804土層断面（南より）



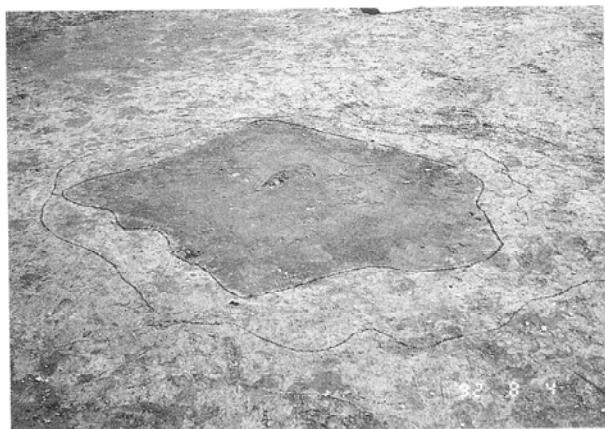
SBIEB805土層断面（南より）



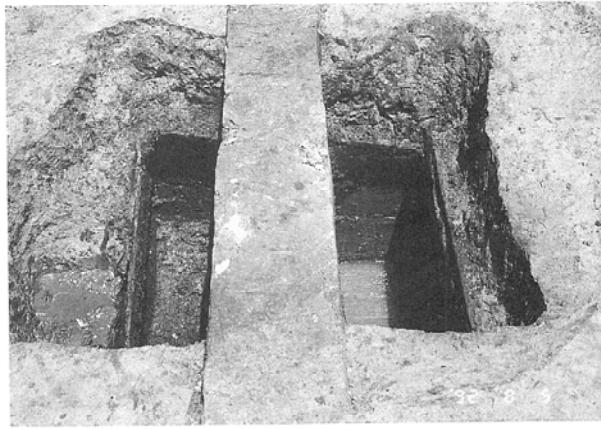
SBIEB807完掘状況（南より）



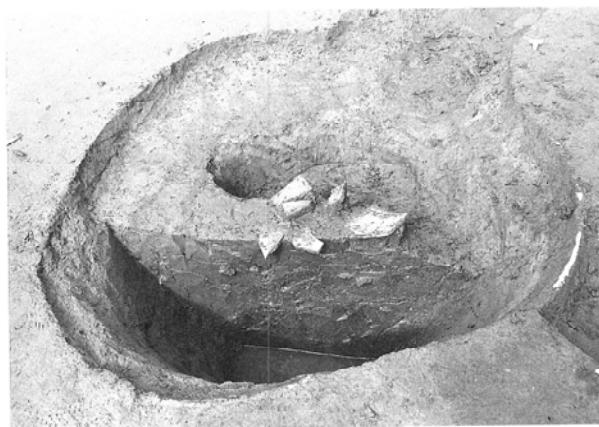
SBIEB905土層断面（南より）



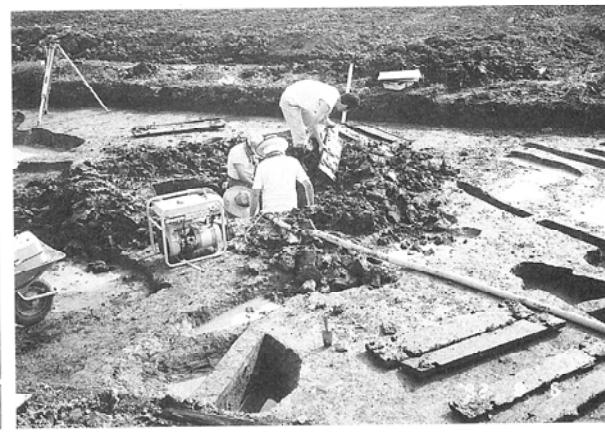
トレンチ9-SE53検出状況（北より）



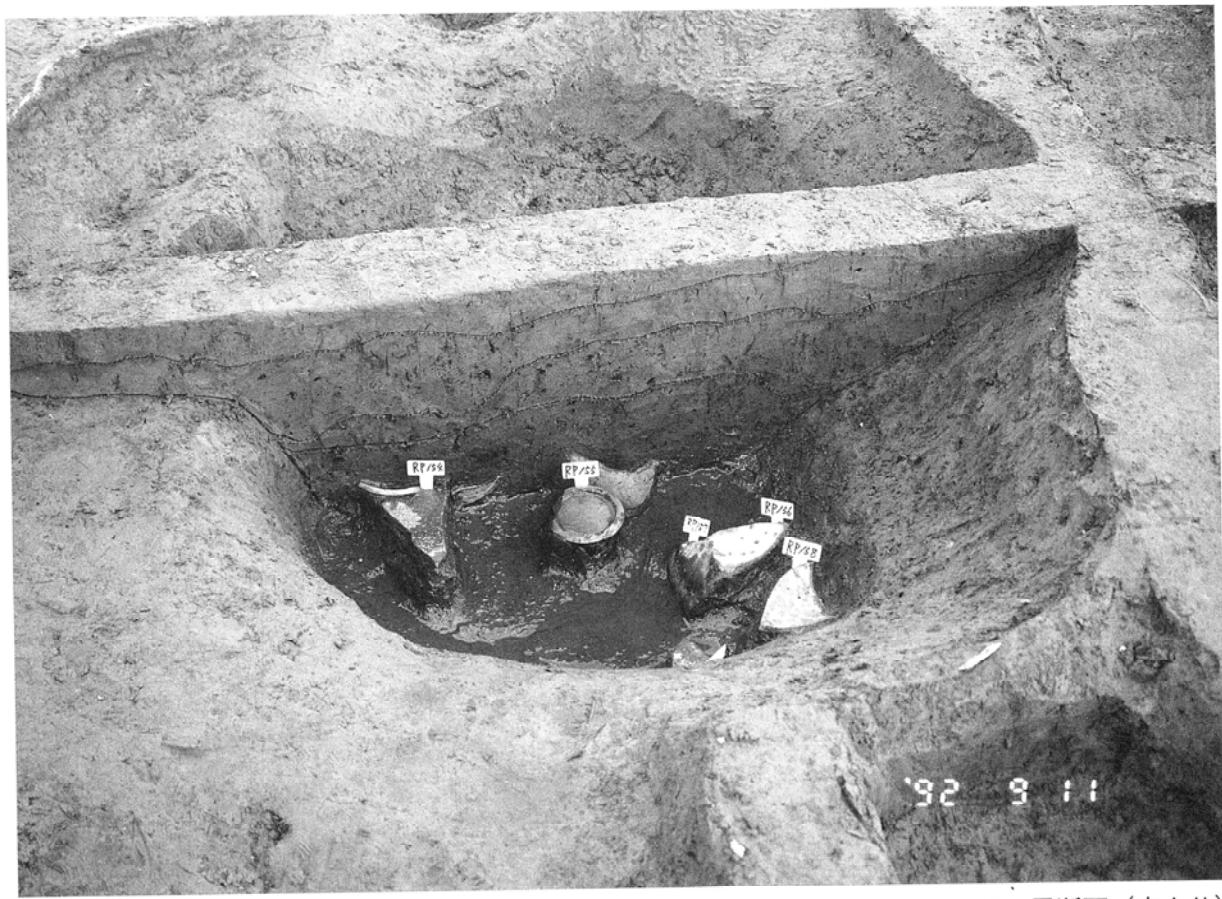
トレンチ9-SE53精査状況（南より）



SE274 4層 遺物出土状況（南より）



トレンチ9-SE53完掘状況（北東より）



SE407土層断面（南より）



SK698遺物出土状況（西より）



SK698遺物出土状況（東より）



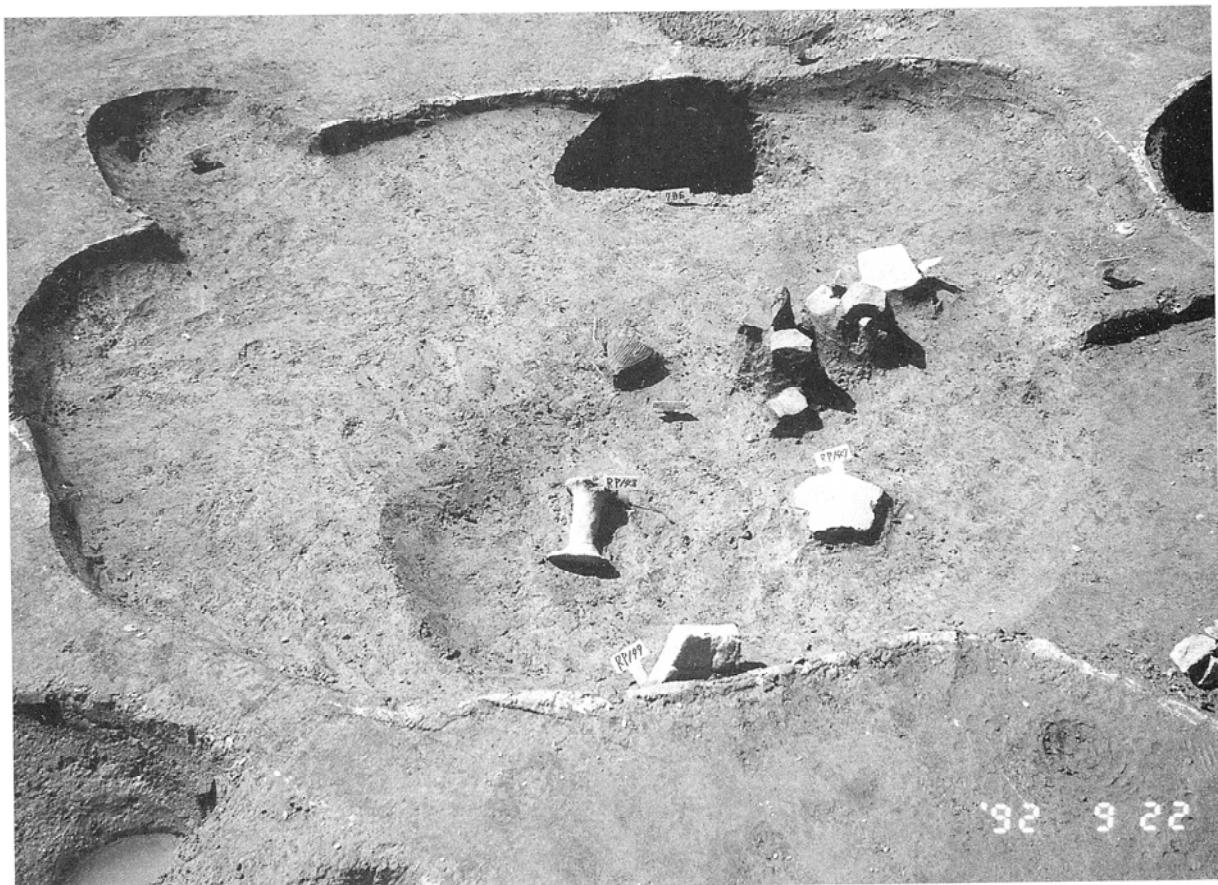
SK698遺物出土状況（西より）



SK698土層断面（東より）



SK698遺物出土状況（西より）



SK407完掘状況（東より）



SK407遺物出土状況（東より）



SK407遺物出土状況（東より）



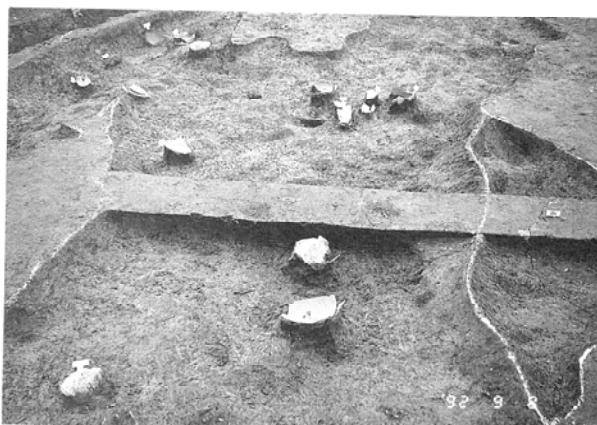
SK407土層断面（東より）



SK407RP148出土状況（東より）



SX180遺物出土状況（北より）



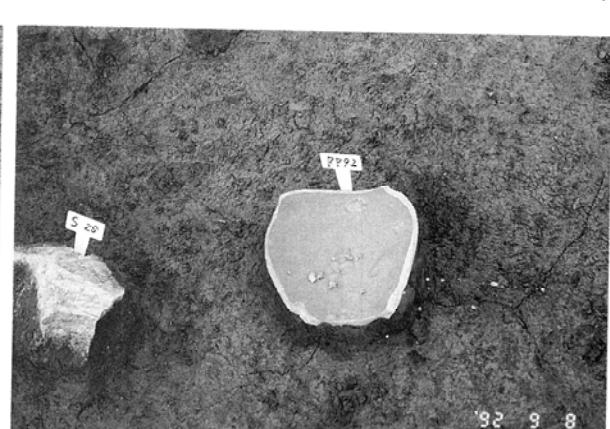
SX180土層断面（南より）



SX180遺物出土状況（西より）



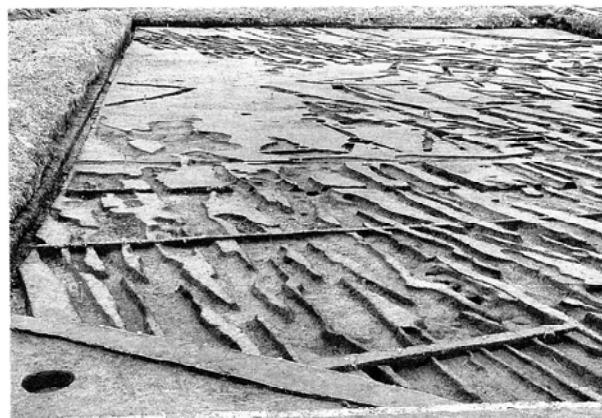
SX180遺物出土状況（北より）



SX180遺物出土状況（西より）



A区畝状溝跡A群完掘状況（南西より）



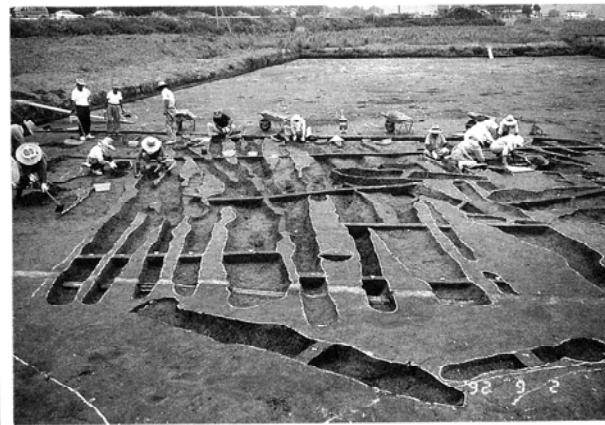
A区畝状溝跡A群完掘状況（南より）



A区畝状溝跡A群完掘状況（南西より）



A区畝状溝跡A群完掘状況（北西より）



A区畝状溝跡A群精査状況（南より）



A区畝状溝跡B群完掘状況（北東より）



A区畝状溝跡B・C群精査状況（南東より）



A区畝状溝跡B・C群完掘状況（北より）



A区畝状溝跡C群完掘状況（北より）



A区畝状溝跡C群完掘状況（北より）



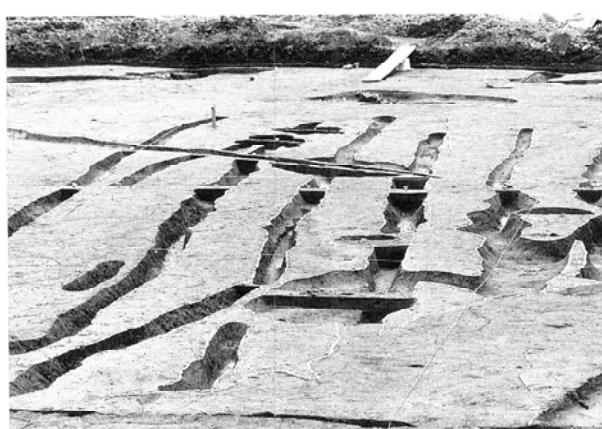
B区畝状溝跡D群検出状況（南より）



B区畝状溝跡D群検出状況（南西より）



B区畝状溝跡D群完掘状況（南西より）



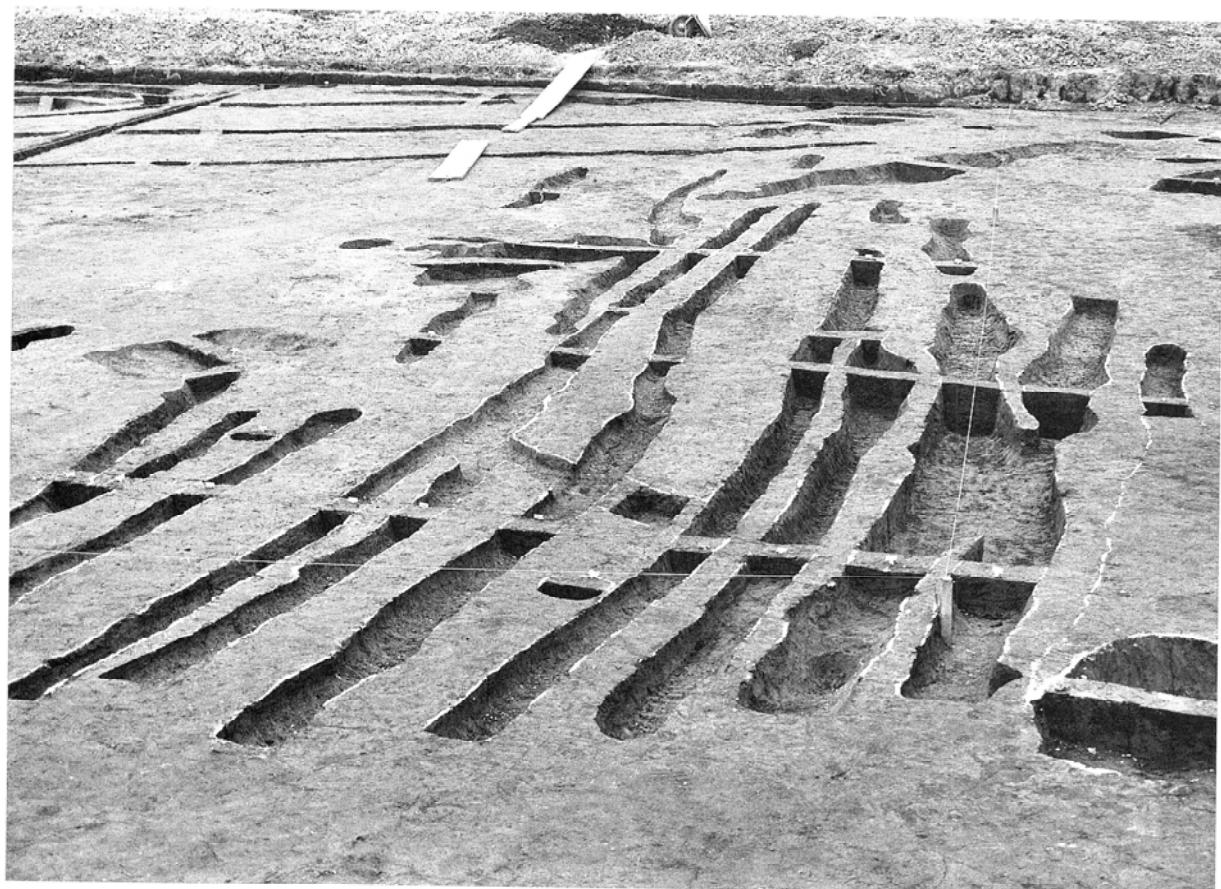
B区畝状溝跡D群完掘状況（北より）



B区畝状溝跡D群完掘状況（南西より）



B区畝状溝跡E群検出状況（南より）



B区畝状溝跡E群完掘状況（南より）



SG19完掘状況（西より）



SG19完掘状況（北より）



SG19遺物出土状況（北より）



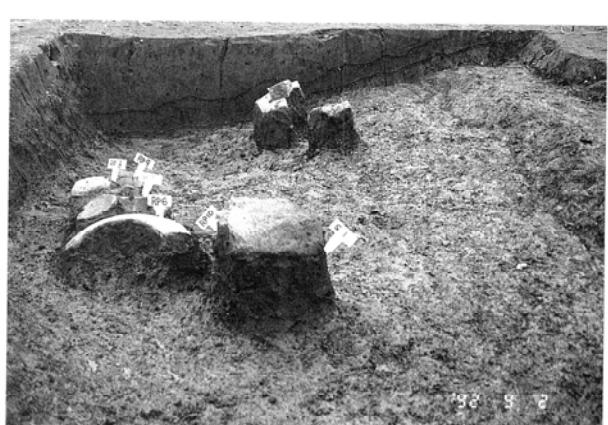
SG19遺物出土状況（西より）



SG19完掘状況（南より）



SG19完掘状況（西より）



SG19土層断面（北より）



SG19精査状況（北西より）



SG19遺物出土状況（北西より）



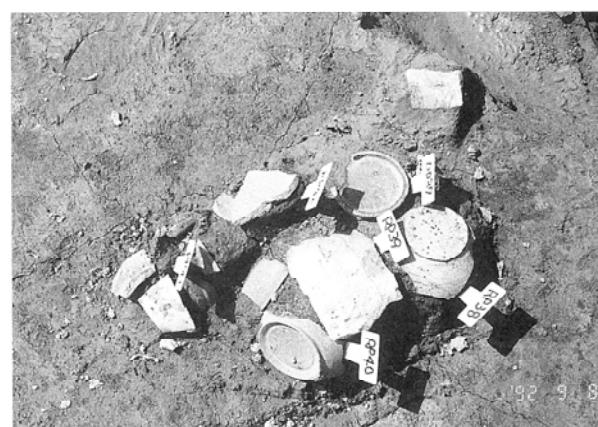
SG19遺物出土状況（北より）



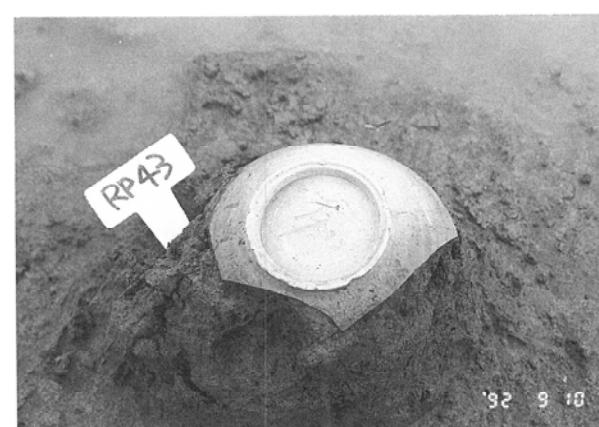
SG19遺物出土状況（北西より）



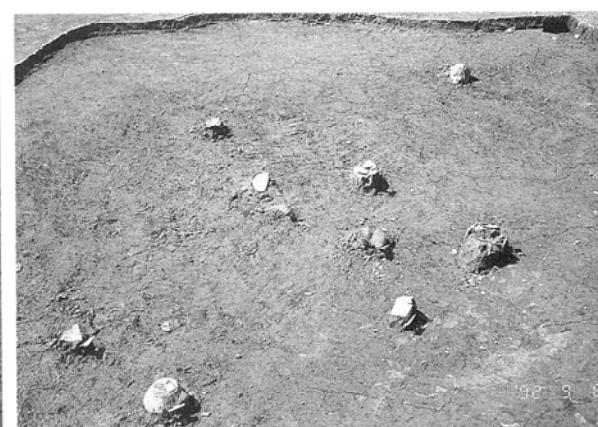
SG19遺物出土状況（北より）



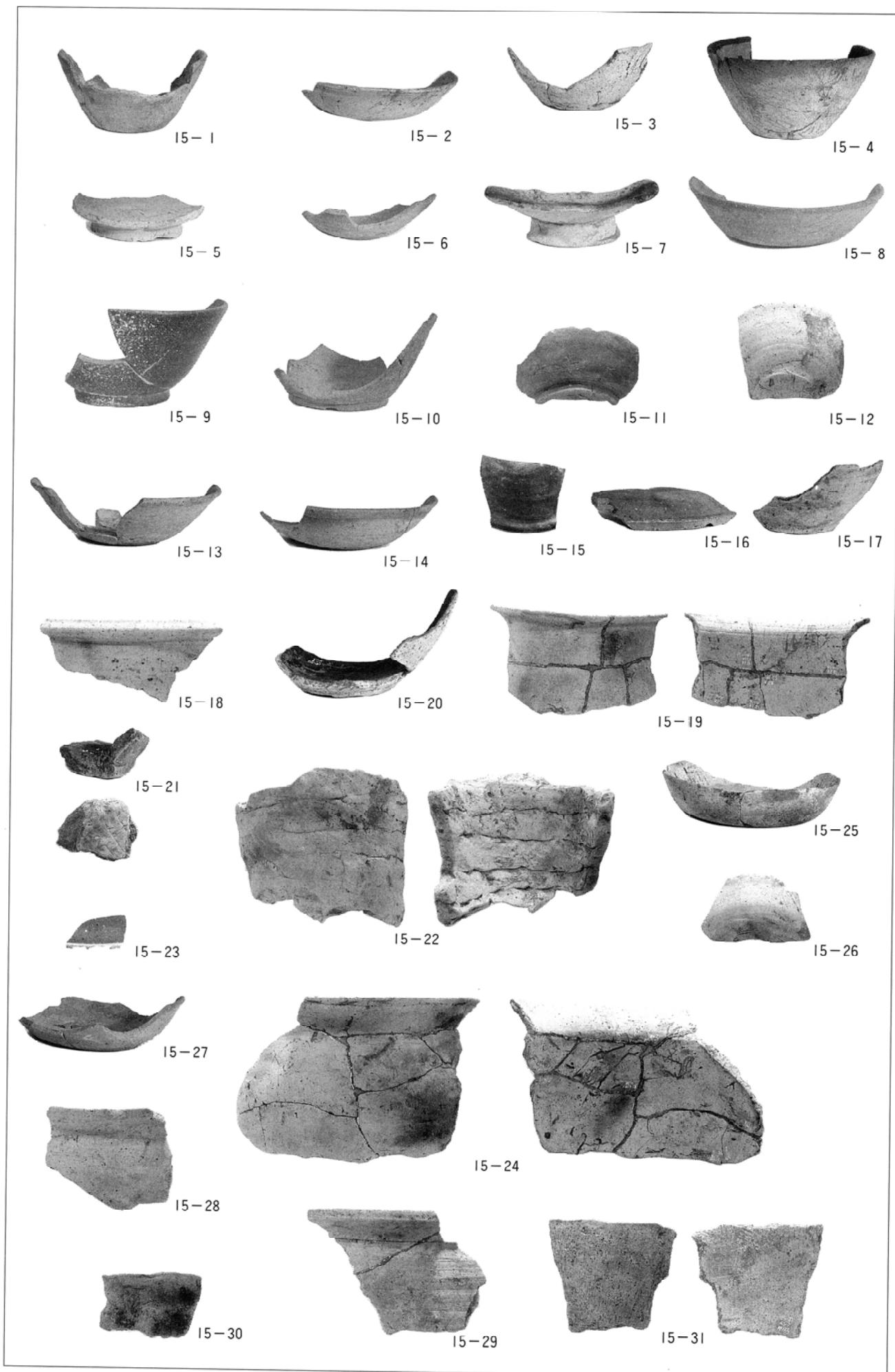
SG19遺物出土状況（東より）



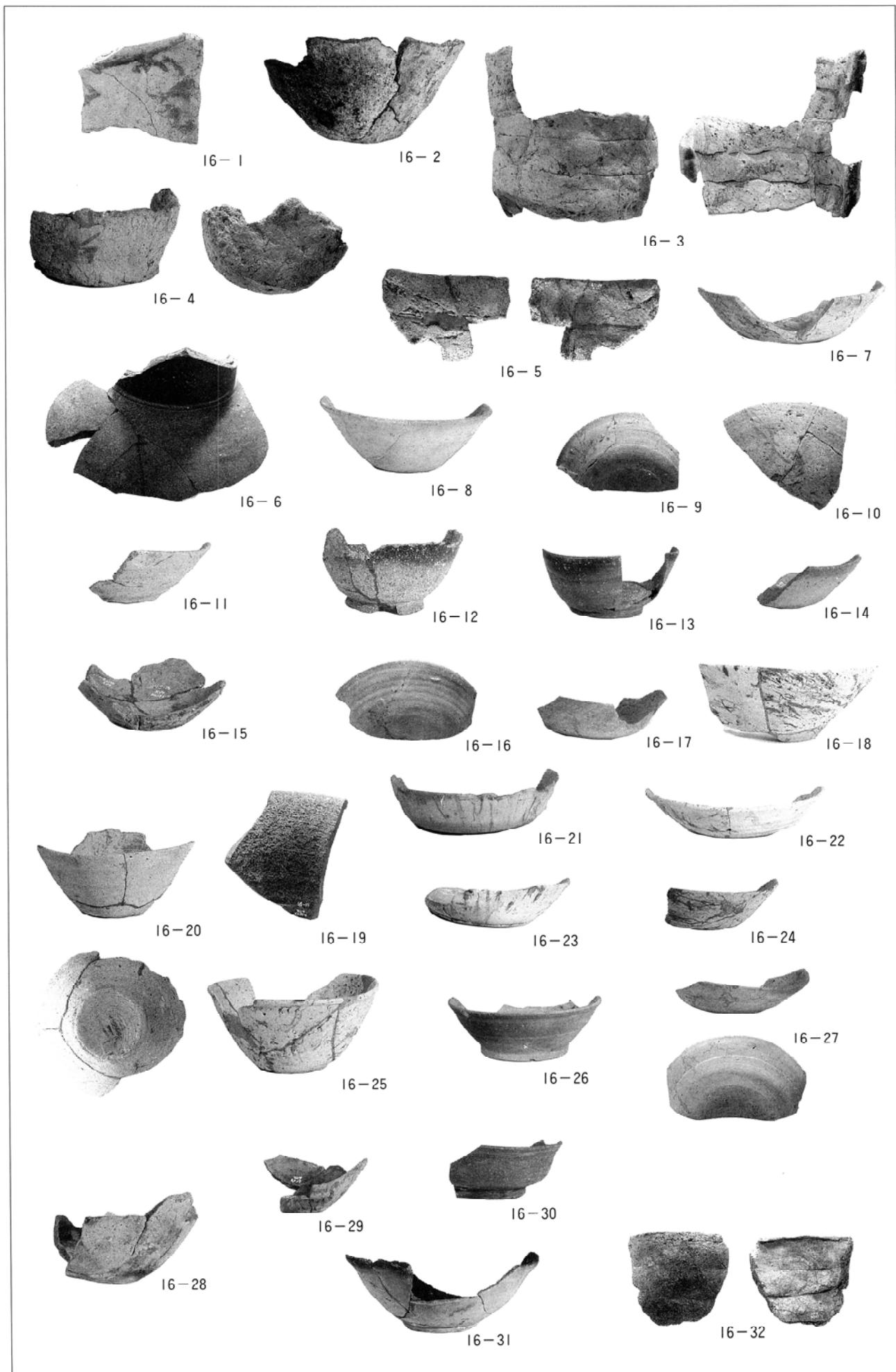
SG19遺物出土状況（西より）

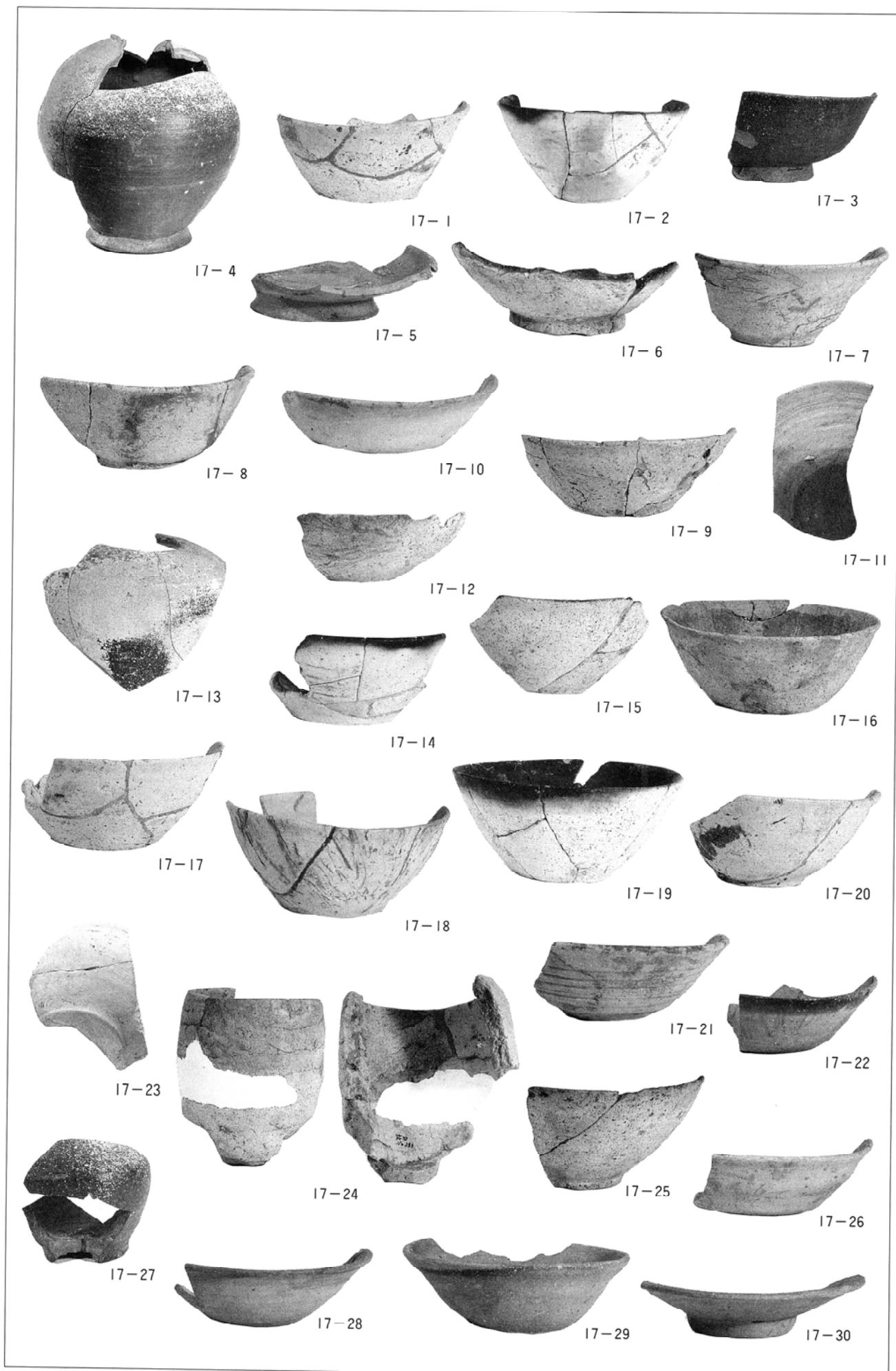


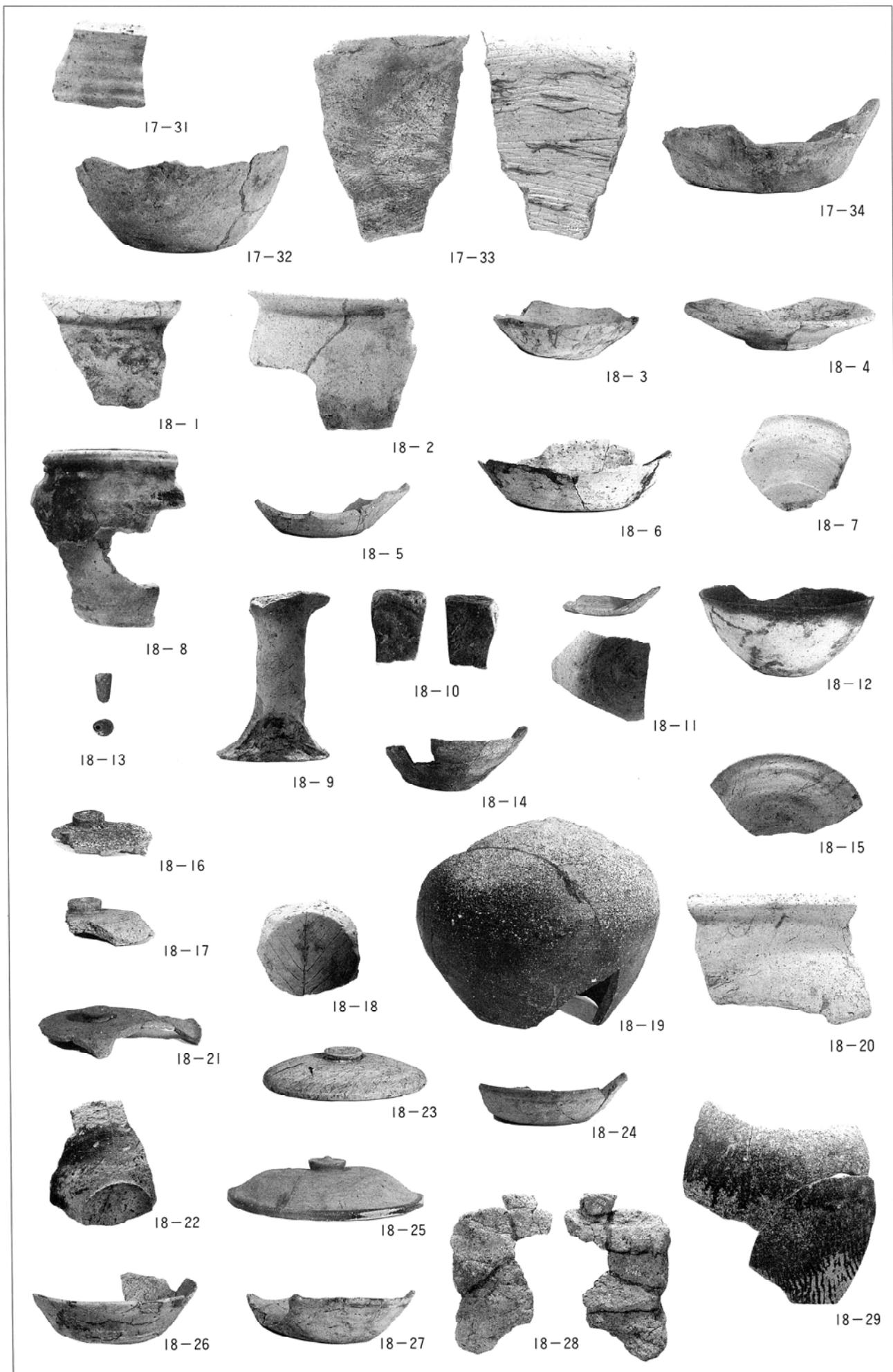
SG19遺物出土状況（東より）

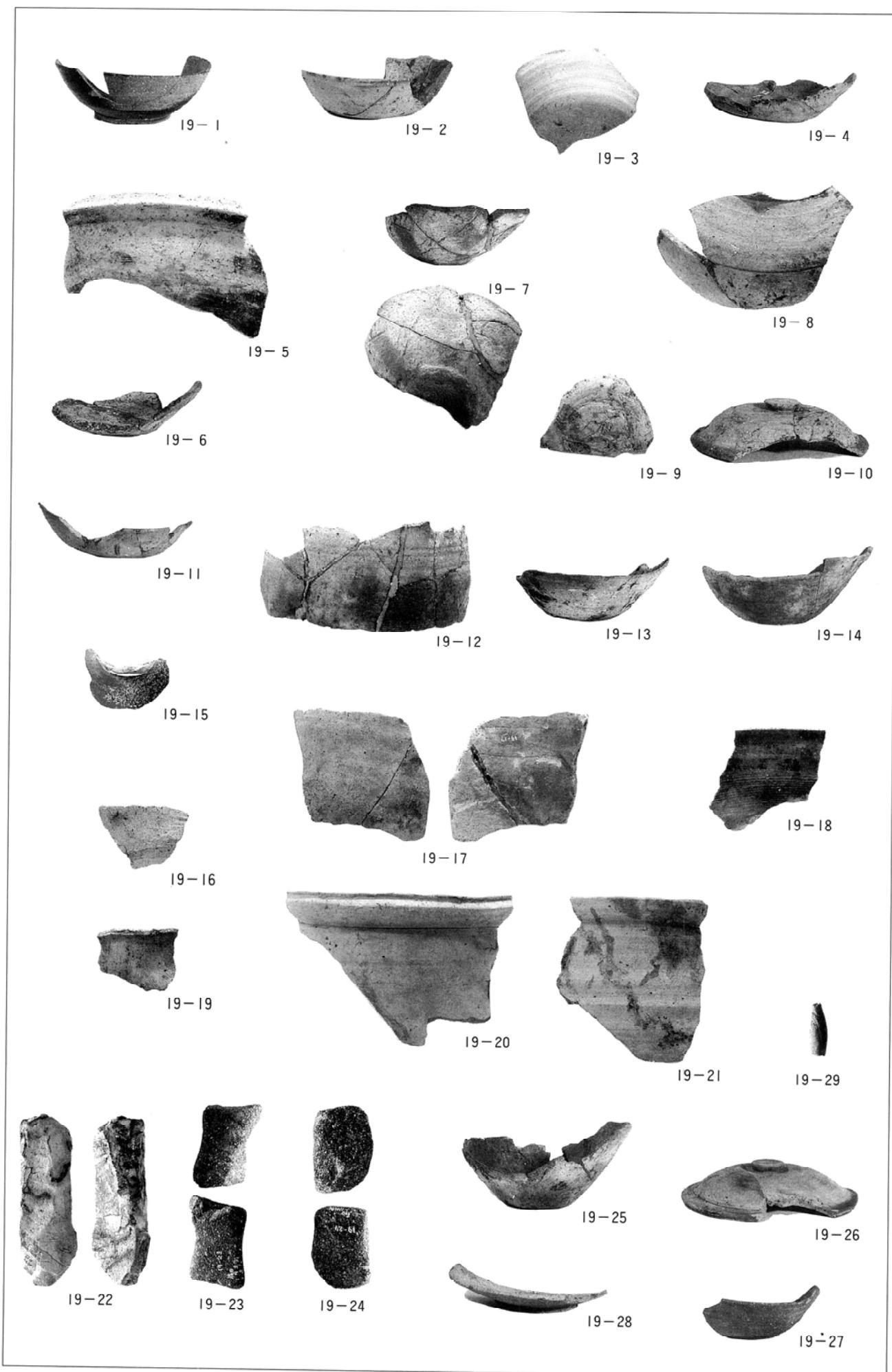


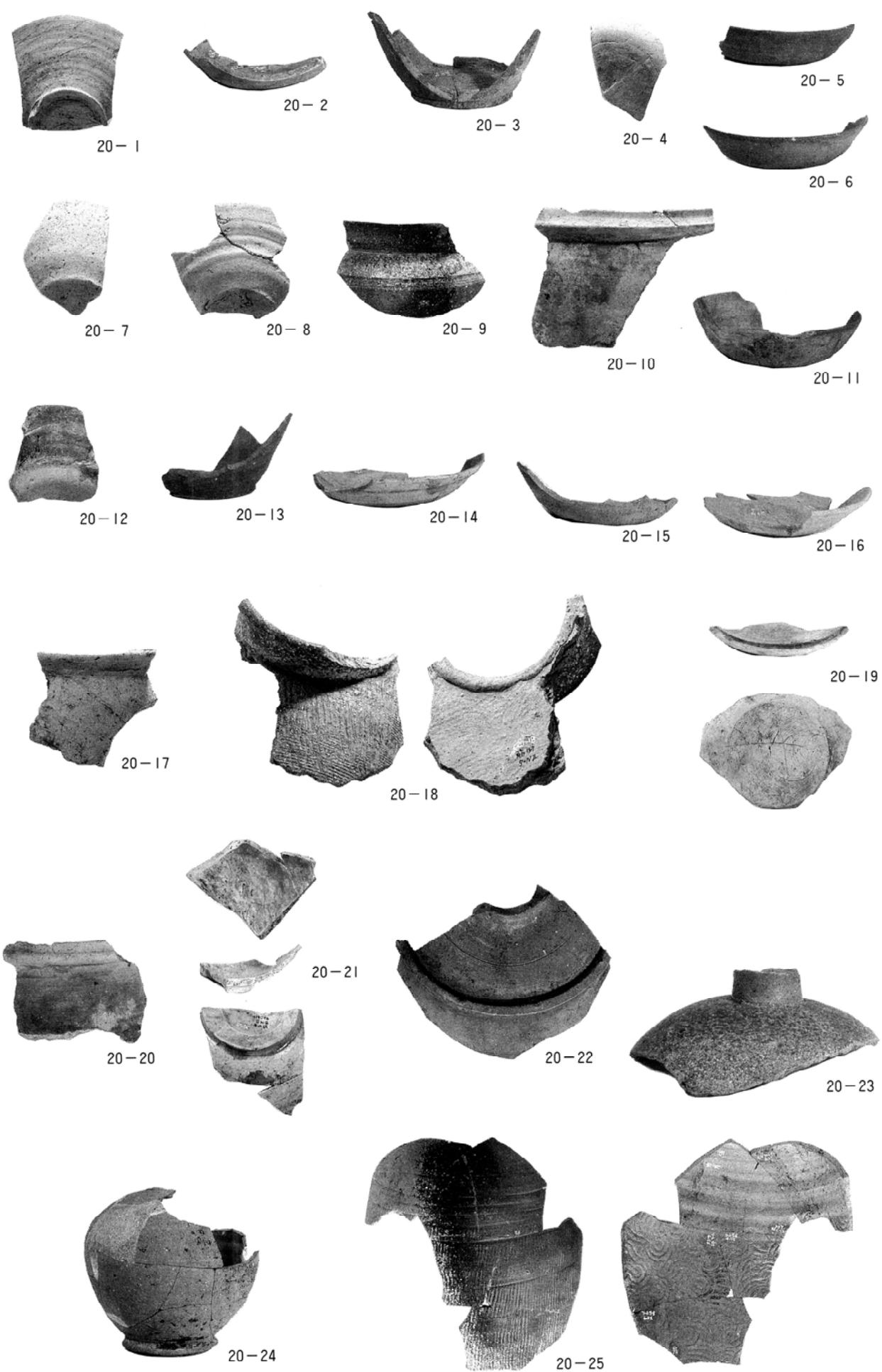
*15-1は挿図第15図の1番を表す。

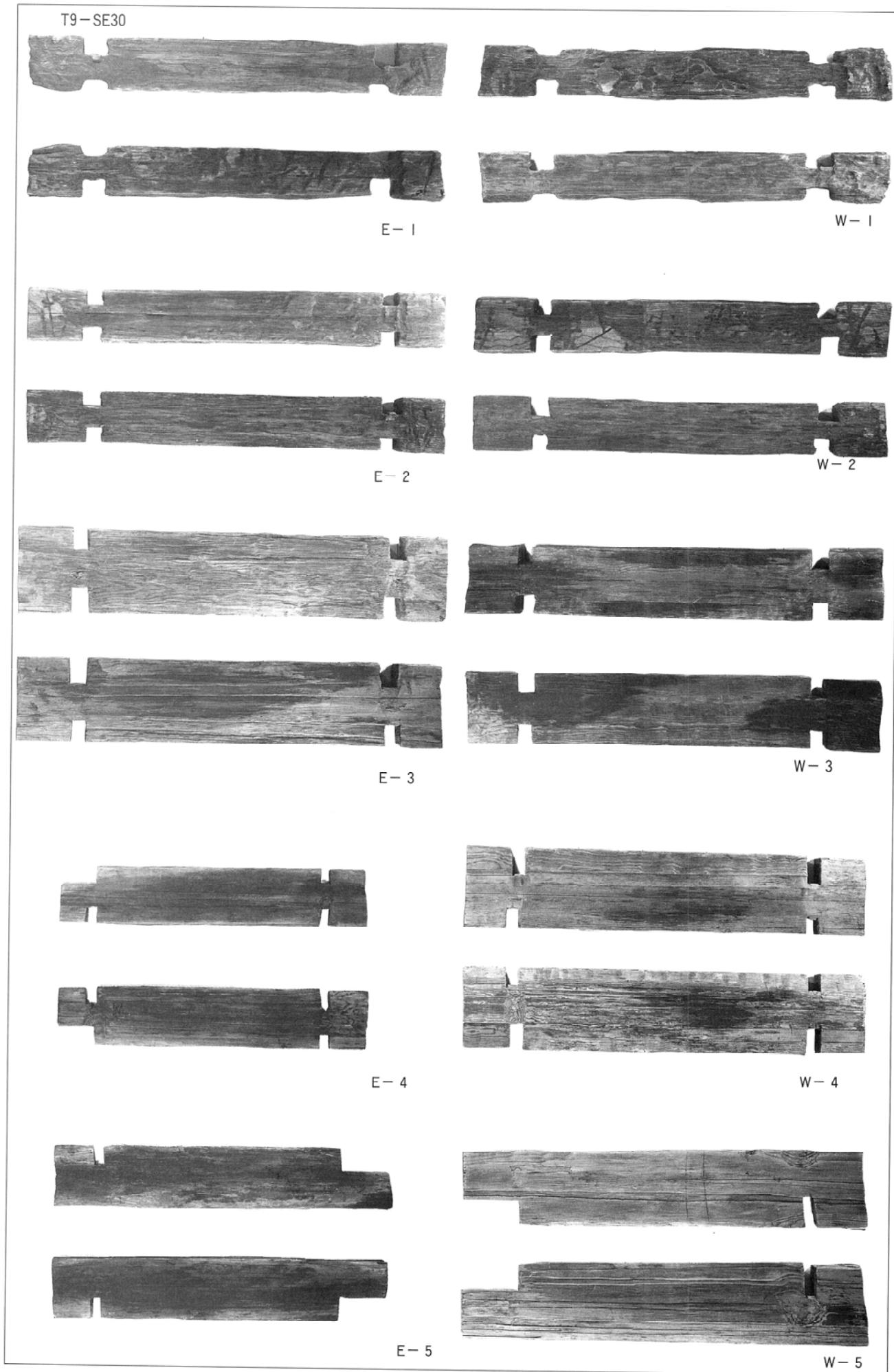




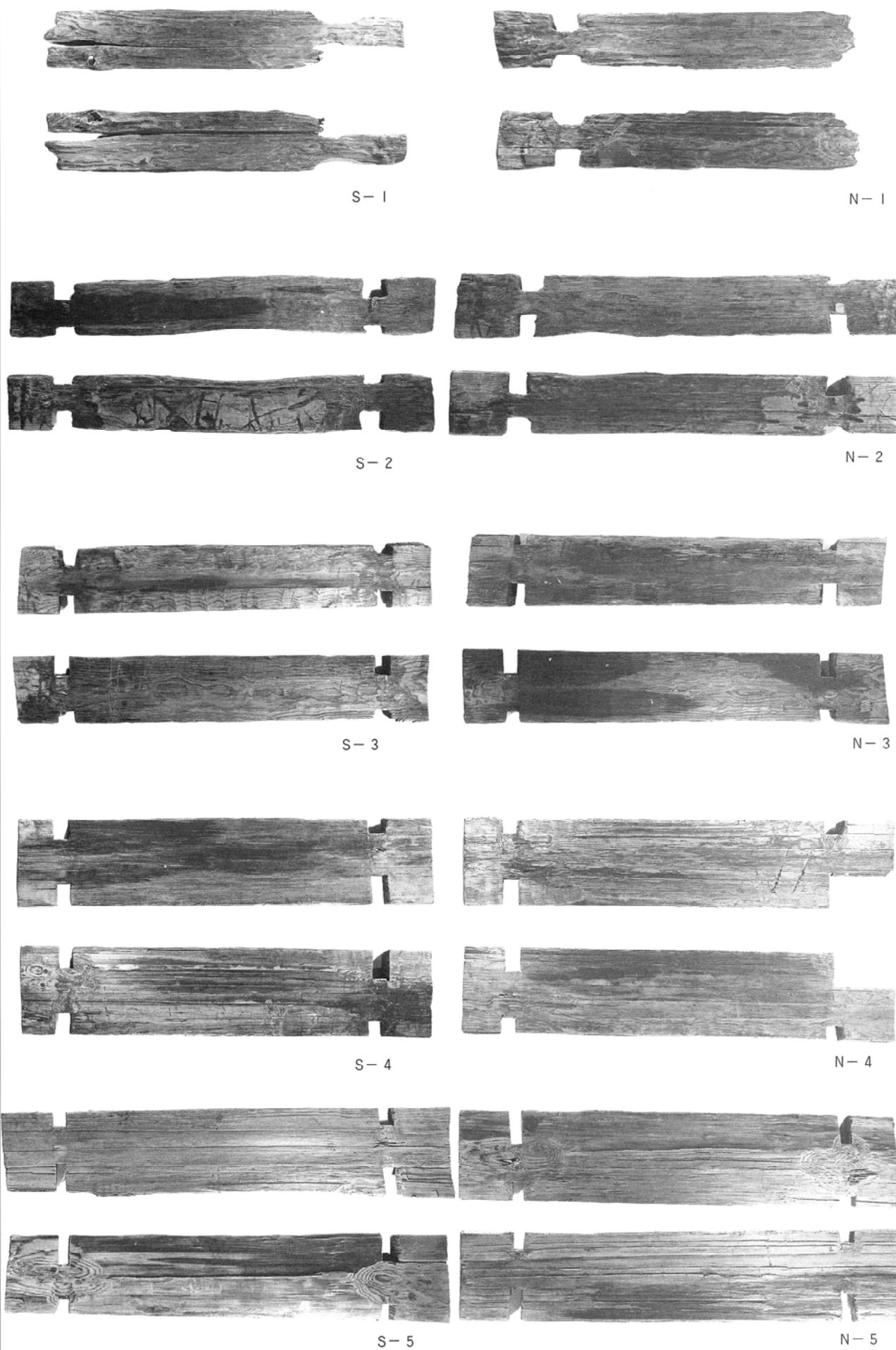








T9-SE30



山形県埋蔵文化財調査報告書第187集

すじ た けい じき
筋 田 遺 跡
はり と い じき
発掘調査報告書

平成5年3月25日発行

発行 山形県教育委員会

印刷 山形印刷株式会社
